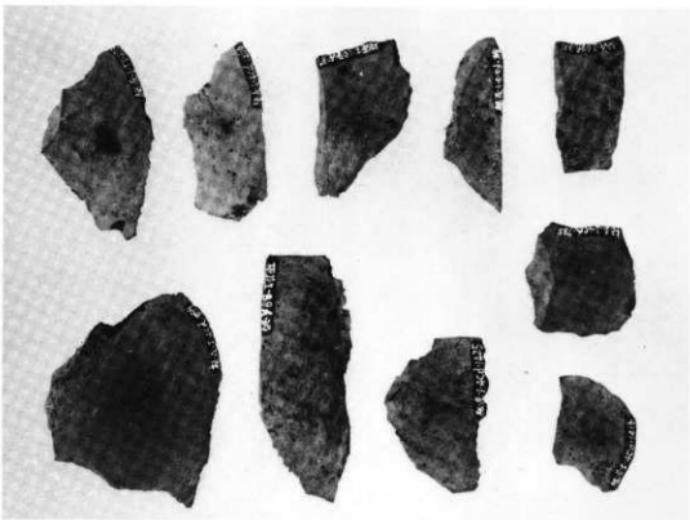


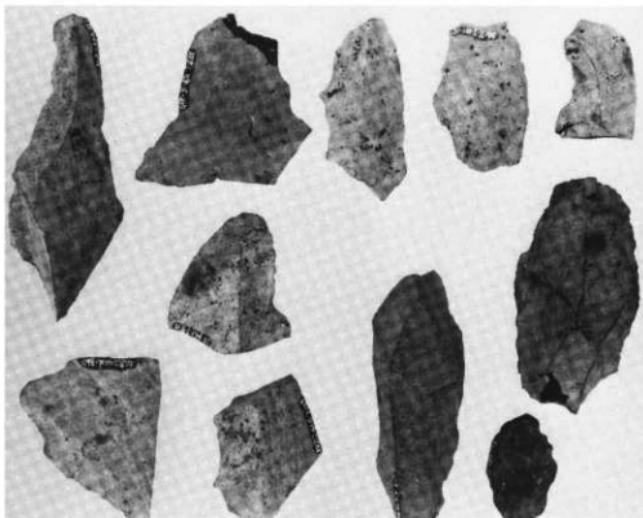
1 制片 (背面)



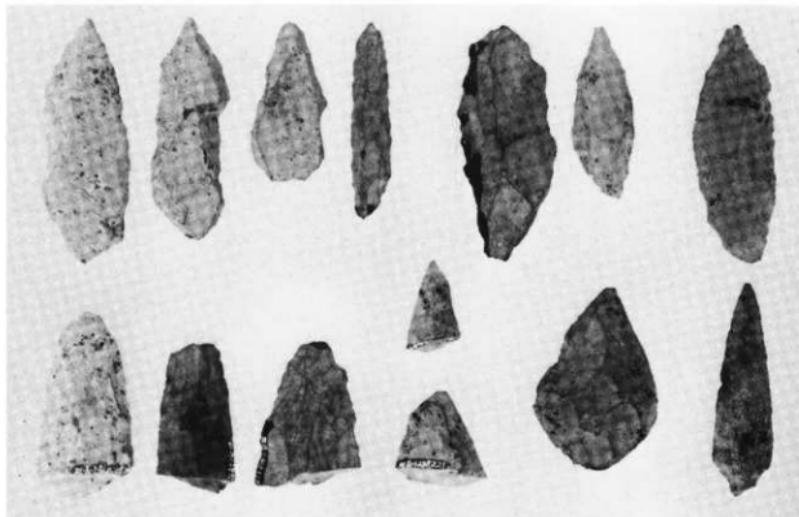
2 制片 (腹面)



1 石 核



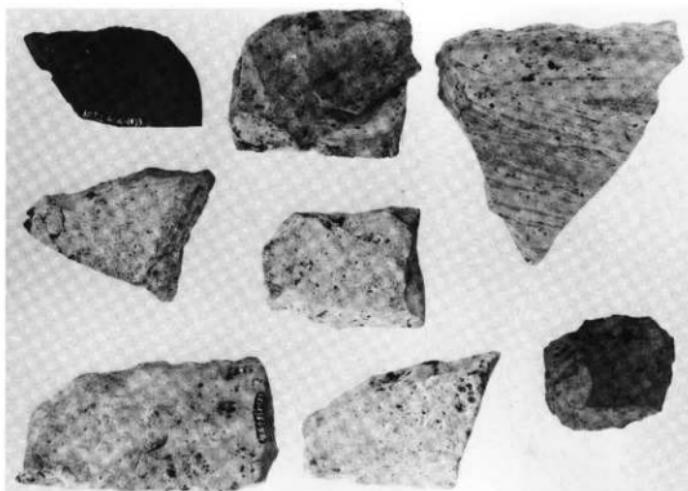
2 石 核



1 尖頭器



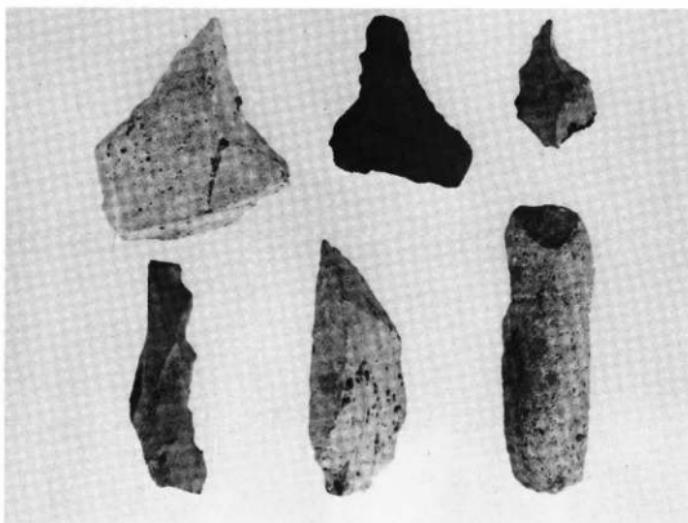
2 尖頭器



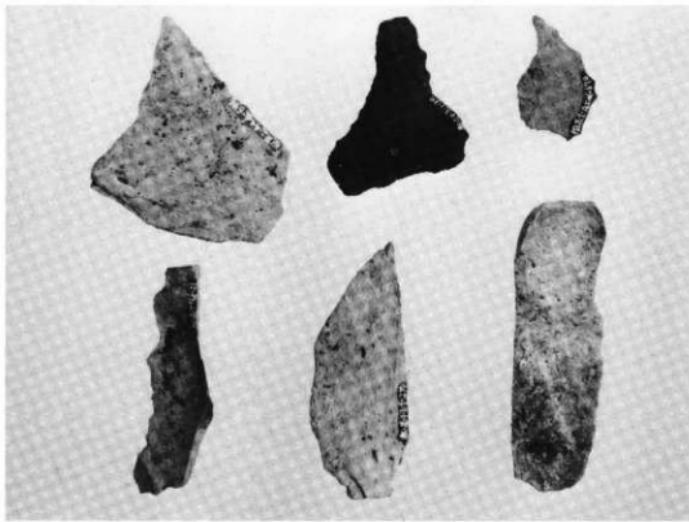
1 スクレイパー



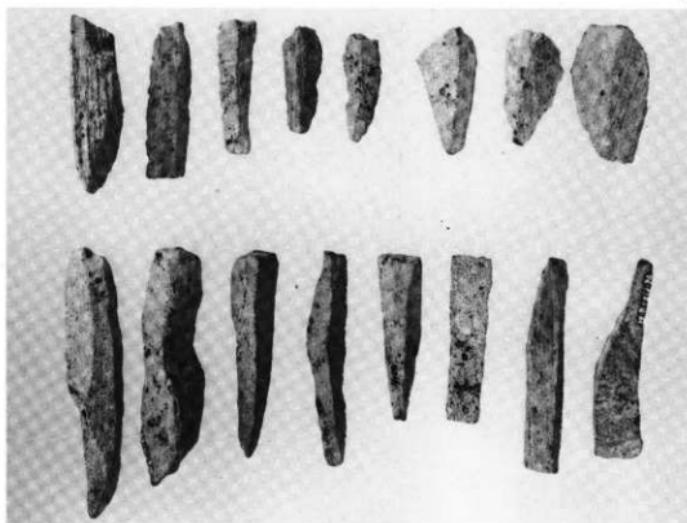
2 スクレイパー



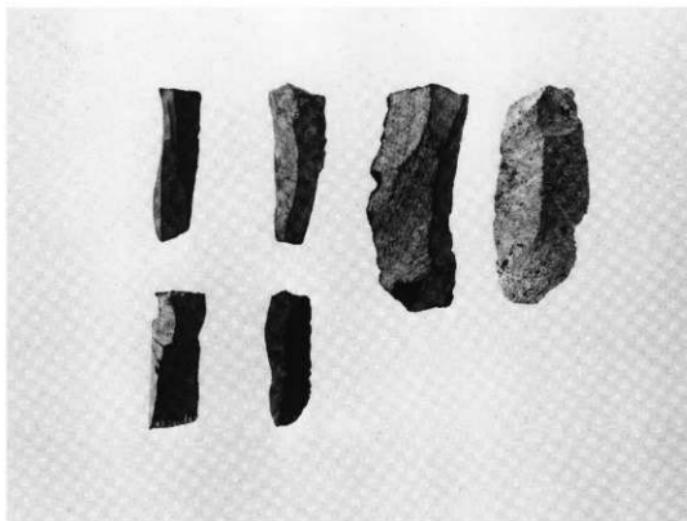
1 ドリル・舟底形石器・刺片尖頭器・叩石



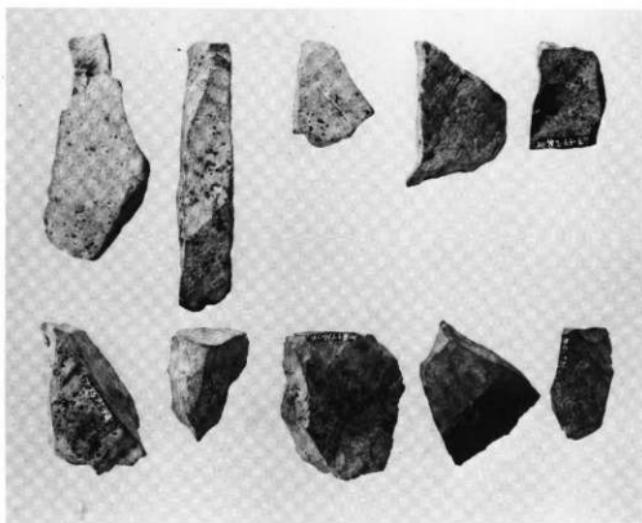
2 ドリル・舟底形石器・刺片尖頭器・叩石



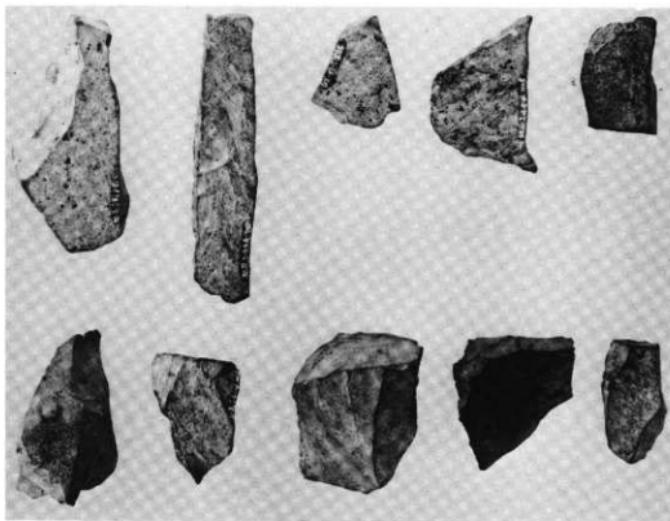
1 細長削片



2 細長削片



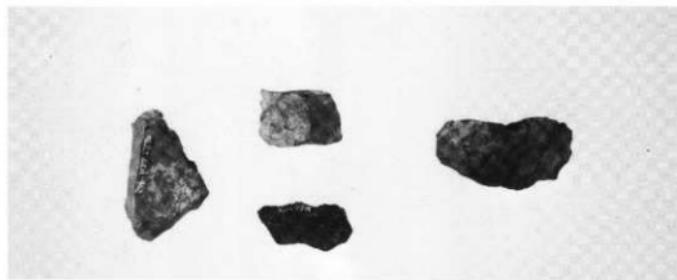
1 縱長剝片石核



2 縱長剝片石核



1 細石刃



2 細石核未製品



1 細石核



2 細石核



1 細石核



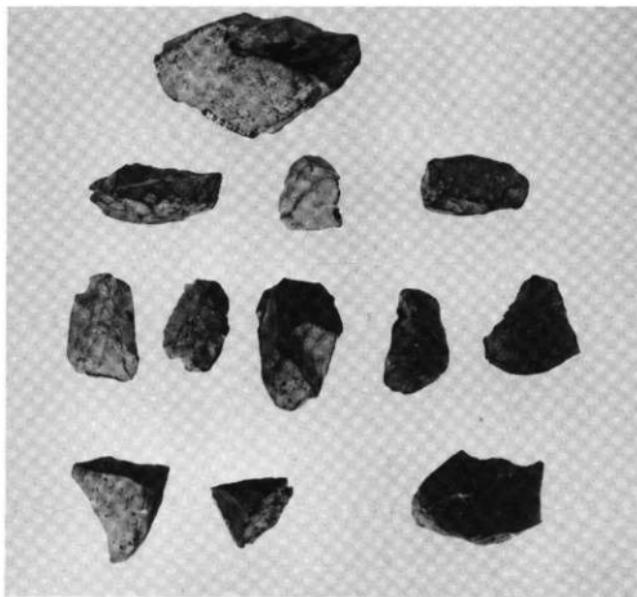
2 細石核



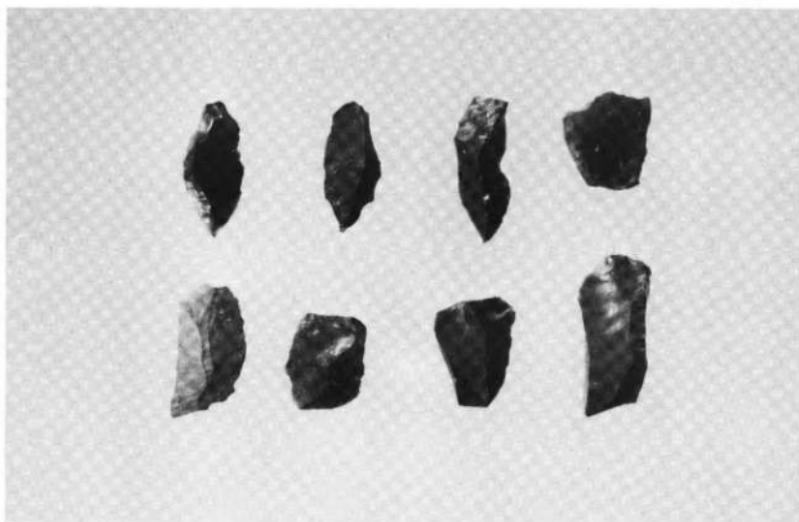
3 サヌカイト製細石核



1 再生剝片・スボール



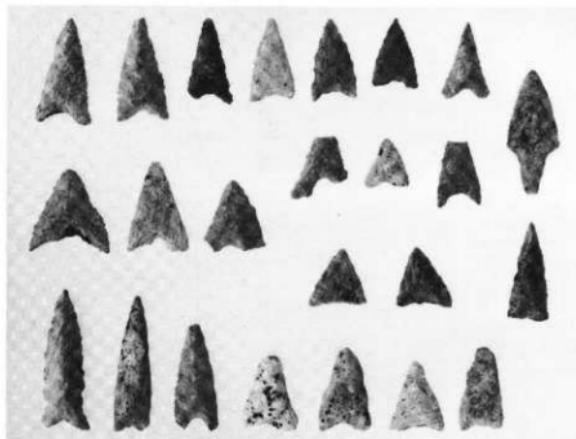
2 ハリ賀安山岩剝片



1 黒耀石 (ナイフ形石器・台形石器・剥片)



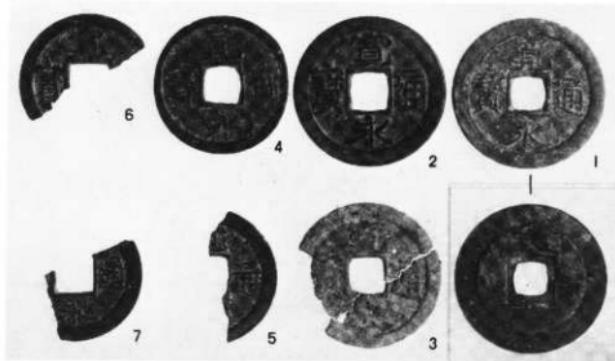
2 黒耀石 (ナイフ形石器・台形石器・剥片)



1 石鏃



2 土器器



3 錢貨

IV がんど遺跡

例　　言

1. 本報告は、1979年9月3日から1980年2月8日まで実施された、坂出市櫻石島に所在するがんど遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、文化行政課技師大山真充、嘱託大砂古直生・町川義見が担当した。
3. 調査に際しては、櫻石島瀬戸大橋対策協議会、同自治会から多大の協力を受けた。記して謝意を表したい。
4. 出土した人骨は、坂出警察署を経由して、香川県警察本部刑事部鑑識課に鑑定を依頼した。鑑定結果は、付載した鑑定書のとおりである。
5. 本報告の執筆は文末に記した。編集は大砂古の協力を得て大山が行った。

目 次

Iはじめに	121
II調査の経過（日誌抄）	124
III調査の概要	
1. 調査方法	125
2. 土層および本遺跡の時間的推移	129
3. 遺構	130
4. 遺物	132
(1) 土器類	132
(2) 石製品類	137
IVまとめ	149
[付載]	
出土人骨鑑定表	153

掲 図 目 次

第1図 檜石島地形図	122	第11図 陶器実測図(2)	136
第2図 がんど遺跡・北浦遺跡周辺地形図	123	第12図 石塔基礎実測図	137
第3図 地元有志による慰靈祭風景	125	第13図 白峰寺十三重塔西塔実測図	138
第4図 遺物整理風景	125	第14図 石仏実測図	138
第5図 がんど遺跡地形図 地区割り図	127	第15図 出土五輪塔	139
第6図 C-8区 溝状遺構層序図	129	第16図 五輪塔出土状況図	140
第7図 がんど遺跡地形図 遺構配置図	131	第17図 空・風輪実測図	142
第8図 土師質土器実測図	133	第18図 空・風輪実測図	143
第9図 土師質椀実測図	134	第19図 火輪実測図	145
第10図 陶器実測図(1)	135	第20図 火輪実測図	146

表 目 次

第1表 遺構一覧表	130	第4表 火輪計測値表	144
第2表 土師質土器計測値表	132	第5表 水輪計測値表	146
第3表 空・風輪計測値表	141	第6表 地輪計測値表	148

図 版 目 次

図版1 (1) がんど遺跡調査前遠景(東から)		図版7 (2) C-11区 石列(西から)	
(2) 伐開風景		図版8 (1) E-7区 5号墓・6号墓 (南から)	
図版2 (1) 伐採後、調査区遠景(東から)		(2) 同上(西から)	
(2) 伐開後、調査区遠景(西から)		図版9 (1) E-7区 6号墓骨壺出土状況 (北から)	
図版3 (1) 伐開後風景		(2) 同上 骨除去後(西から)	
(2) E-7区 調査前、五輪塔、石散乱状況		図版10 (1) E-7区 5号墓(南から)	
図版4 (1) E-7区 発掘風景		(2) 同上 積石除去後(北から)	
(2) 調査区全景(南西から)		図版11 (1) E-8区 4号墓(南から)	
図版5 (1) E-7区 五輪塔、石散乱状況 (南から)		(2) 同上 壓破片除去後、掘り方 (南東から)	
(2) E-7区 石散乱状況(西から)		図版12 (1) E-8区 3号墓(西から)	
図版6 (1) 調査区全景(東から)		(2) 同上(北から)	
(2) 同上(南から)		図版13 (1) E-6区 7号墓(西から)	
図版7 (1) B, C, D区 全景 (西から)		(2) 同上(北から)	

- 図版14 (1) E-6区 9号墓（南から）
(2) E-6区 8号墓（南から）
- 図版15 (1) E-10区 1号墓（東から）
(2) 同上 石、雑器除去後（東から）
- 図版16 (1) B-8, C-8区 溝状遺構
(西から)
(2) 同上（東から）
- 図版17 (1) B-8, C-8区, 溝状遺構
(南から)
(2) 同上 埋土堆積状況（南から）
- 図版18 (1) E-8, D-9区 石散乱状況
(南から)
(2) E-7区 調査風景（北から）
- 図版19 (1) E-8区 五輪塔出土状況
(南から)
(2) 同上
- 図版20 (1) E-8区 五輪塔出土状況
(南から)
(2) 同上（南東から）
- 図版21 (1) E-8区 4号墓, 五輪塔出土
状況（東から）
(2) 同上（南から）
- 図版22 (1) C-9区 土師質土器出土状況
(北から)

- 図版22 (2) 同上（西から）
- 図版23 (1) C-8区 亀山焼出土状況
(東から)
- 図版23 (2) C-9区 有溝土錐出土状況
(西から)
- 図版24 (1) E-7・8, F-7・8区
溝状遺構（東から）
(2) E-7区 溝状遺構（北から）
- 図版25 (1) E-7区 南壁層序
(2) F-7区 土層珪除去後（北から）
- 図版26 (1) D-9, E-8区 発掘風景
(西から)
(2) D-9, E-8区 五輪塔石除
去後（北東から）
- 図版27 (1) 凹地（F, G-11区）発掘風景
(西から)
(2) 同上 東壁層序
- 図版28 (1) G-1～6区 発掘全景（西から）
(2) G-2区 東壁層序
- 図版29 土師質土器
- 図版30 土師質土器・陶器
- 図版31 五輪塔（空・風輪）
- 図版32 五輪塔（火輪）
- 図版33 五輪塔（水・地輪）・石仏

I はじめに

がんど遺跡は、櫛石島の北西にある山塊から東にのびる、標高約20mの低丘陵上に位置している。

がんど遺跡を含むこの地区の予備調査は、昭和51年7月から9月まで実施された。

予備調査対象地区は、「第I調査地区」と呼ばれ、地形などから8つの調査小区に分割された。

予備調査の結果、第I調査地区内で本調査を実施すべき箇所は、第1調査小区の篠の巣遺跡北端部、第5調査小区のがんど凹地、第4調査小区の望の城とよばれる丘陵斜面、それに第8調査小区の石の塔およびその周辺部の5箇所とされた。

この5ヶ所の調査小区のうち、第1・4調査小区は工事区域外となつたため、今回の本調査範囲からは除外された。

今回の本調査で対象となつた地区は、北浦通り丘陵地、がんど凹地、および石の塔周辺の3ヶ所である。

調査対象総面積は12700m²である。

北浦通りと、がんど部分は、前者が旧石器時代の遺物散布地で、後者は中世の寺院跡で遺跡の性格が異なるため、それぞれ別個の遺跡として取り扱い「北浦遺跡」「がんど遺跡」と名称を与え、報告することにする。

ここで報告するがんど遺跡は、予備調査では各所の写真撮影と地形測量が行われ、試掘は実施されていない。

「がんど」という地名は伽藍堂の転訛といわれ、その他、「しゃかのもと」「さいのかあら」という地名も残っている。そして五輪塔や格狭間のある基礎石などがあることから、平坦地に小伽藍の御堂が営まれていたのではないかと推測されていた。また平坦地の北斜面に板石が散乱し、箱式石棺の可能性が指摘された。

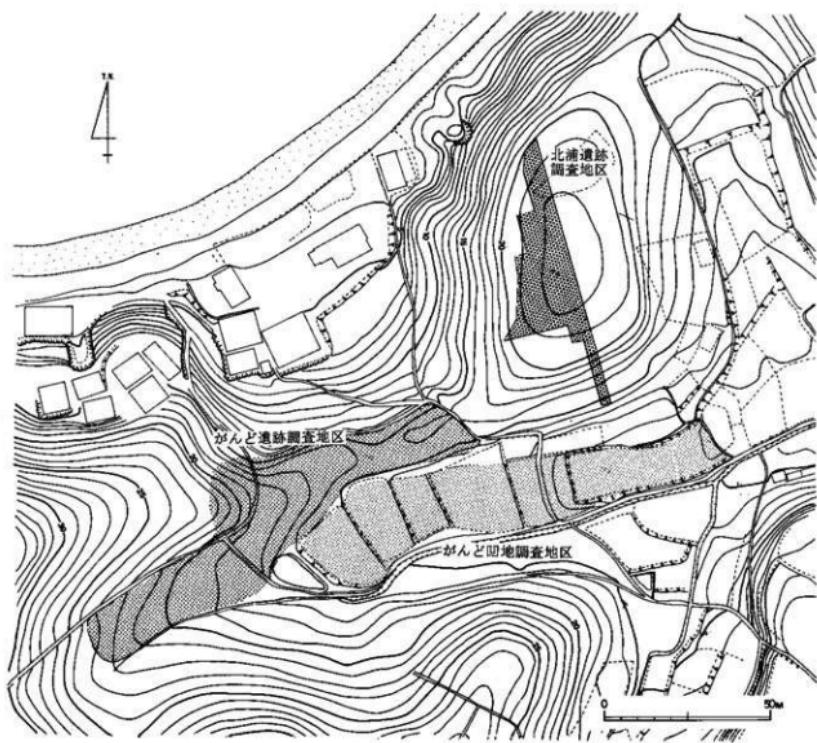
一方、凹地部分には、「御座船」が奥深く入り込んでいたという伝承があり、旧地形の復原という課題が提示された。

以上3点が本調査に際しての当面の課題であった。

(大山)



第1図 様石島地形図



第2図 がんど遺跡・北浦遺跡周辺地形図

II 調査の経過（日誌抄）

がんどう遺跡の発掘調査は、昭和54年9月3日から開始され、昭和55年2月8日で現場作業を一時中断した。これは墓地域が南と西方向に広がることが判明し、調査体制を改める必要がでてきたためである。2月中旬から3月上旬までは坂出連絡事務所で整理作業を行い、3月中旬より現場を再開する予定である。

以下、調査日誌を抄録しておく。

54・9・3、調査初日。9:00、坂出港で器材を積み出帆。途中与島で器材を積み足し、10:00標石鳥到着。現場にテントを設置する。

54・9・5、台風一過で快晴、草刈りを開始する。

54・9・7、がんどう凹地部分に主軸を設定し、杭打ちを行う。将来排土置場となるG・H-9・10区に6×12mの発掘区に設定する。

54・9・10～22、G・H-9・10区の発掘、人力では地表下150cmが限界で、浸水が激しくなり、土層確認で発掘を打ち切る。

54・9・25、本日より石の塔周辺の立木伐採を開始する。

54・9・26～29、伐採と併行して、杭打ちを進めていく。

54・10・1、発掘前の全景写真撮影、区画設定の杭打ちを終え、C-11・12区の発掘に着手。

54・10・11、B-8、C-10・13、D-12・13区の発掘着手、土師質土器、備前焼甕破片出土。

54・10・12～16、B、C、D区を東から西へ順次発掘を進めていく。

54・10・17 E-7区の石列の南側で人骨らしきもの出土。

54・10・20～24、遺跡の中心部となる平坦面の表土、第2層を除去し終り、遺構面を出す。

54・10・25、発掘区全域の写真撮影。畦のヤクショソ図作成にとりかかる。

54・10・26、東部平坦面の伐採を終え、平板測量を行なう。午後より発掘開始。

54・10・27～31、東部平坦面（B、C-14～19区）の発掘。表土下12～25cmで地山が現われ、出土遺物は近代以降の遺物が少量出土するのみ。

54・11・1、再び中心部に戻る。精査に入る。B-8区で溝状遺構のあることを確認する。

54・11・5、本日よりユンボーが入り凹地部分の発掘が開始される。沈没した「御座船」が出現するだろうか。

54・11・6～8、C-8、B-8区の溝状遺構の部分と、E-8区の石散乱地域の精査、実測を終り、写真撮影の後、石を除去する。

54・11・9、E-8区の石が積み重なっている部分から人骨らしきものの出土。この石積みは墳墓だろう。西日本放送が取材にくる。羽佐島の調査が完了し、北浦遺跡発掘用の器材が到着、忙しい日であった。

54・11・12～24、D-7・8、E-7・8・9区の精査が進む。石や五輪塔が予想外に斜面に散乱している。

54・11・26、6、7月に調査を行った与島塩浜遺跡のトレーニングが放置したままであった。

危険なため、大砂古、与島の作業員とともに埋め戻しに行く。この間北浦遺跡の発掘中断。

54・11・30、西部平坦面（F・G-0～6区）の発掘に着手。F-6区に南北トレーニングを入れる。地山が南北へ行くに従い急に落ちこむようだ。

54・12・1、西部平坦地は排土置場の関係で千鳥式に掘り進めていく。大山は本日より奈文研にて2週間研修。

54・12・3～25、西部平坦地の発掘続行。地山が北から南に急激に落ちこみ、深い谷地形であったことが判明。北浦遺跡発掘完了。本年の現場作業本日で終り。

55・1・1～7、新年を迎え、現場を再開する。

55・1・8～18、E-7,8,9区、F-7,8,9,10区の精査、E-8区で地山掘りこみの土壤二基確認。

55・1・19、地元有志による慰靈祭が行われる。



第3図 地元有志による慰靈祭風景



第4図 遺物整理風景

- 55・1・22～30, 精査もほぼ終り, 実測写真撮影。
55・1・31, 念のためにE-6区の発掘にとりかかる。火輪が1点出土, いやな予感がする。
55・2・1, E-6区で地山掘り込みの土壤検出, 陶器片1点出土, 時期が違う。
55・2・4, D-10区で, 土壤が検出され甕, 鉢, カワラケなど出土, どうも埴築らしい。
55・2・5, E-6区の, 12月に検出した性格不明

の土坑を全掘, 染付が出土, どうも座棺墓らしい。近世墳墓が西に広がるようだ。

南にも墓地が広がるらしく, 調査の方針を考え直さねばならなくなつた。

55・2・8, 調査は続行せず, 一時中断することになった。本日をもって一応調査を終えることにする。

(大山)

III 調査の概要

今回の調査対象総面積は, 北浦遺跡周辺部を含めて, 12700 m²である。

発掘総面積は, がんと遺跡およびその周辺部が 2200 m², 北浦遺跡が約 800m²で合計約 3000 m²となり, 対象総面積の4分の1を発掘したことになる。

1 調査の方法

調査対象区域内で最も見通しのきく, 凹地部分に, 任意に東西に長い主軸を定め, この主軸線を基準にして, 6 m方眼を組み, これを調査区割とした。

区画の名称は, 北から南へ向けてA・B・C……とアルファベットを用い, 東西は西から東へ向けて1・2・3…とアラビア数字を用い, 両者を組み合せ, 例えばE-7区と地区標示した。この区画の南北軸は磁北に向かって約7度東偏しているため, 南北軸はほぼ真北方向を指示していることになる。

がんと遺跡およびその周辺部は地形や遺構の状況から, 4つの地区に大別してその概要を述べることにする。

①がんと凹地部は, その名称のとおり, 南北の丘陵にはさまれた谷状の地形を呈するところで, 西から東に行くにしたがって段々低くなつておる, 戦後間もない時期まで水田として利用されていたが, 現在はカヤなどが繁茂し, 荒地化している所である。

この部分は, かっては深く抉りこんでおり「御座船」が奥深く入っていたという伝承があり, 旧地形の復原が望まれていた。

予備調査での試掘結果や、本四公団のボーリング調査の結果を参考にするとかなり深くまで砂層の堆積が認められ、かつ湧水もあるため、人力による発掘には限界があると判断したため、一区画以外はユニバーを導入して発掘した。

凹地部に、幅3～6mの発掘区を東西総長約100mに亘って設定し調査を行った。途中2ヶ所に南北にのびるトレンチを設定し、主に北側の丘陵地との関連を把握しようとした。

調査の結果は、湧水とトレンチ壁面の崩壊が激しく、満足のいく土層図も作成できない状況であったが、次の2点は確認した。

1つは、現表土下150cmまでは確実に近世以降の陶器片が出土し、かってはかなり深い谷状地形がであったと思われる。

2つは、地山が急激に落ちこみ肩となる部分は、現在、水田となっている所の北端よりさらに2～3cm北寄りの部分で、谷の幅は、現在地形図から想定されるより幅広いものであった。

上の2点から、船が入りこんだという伝承もあながち否定はできないが、海平面のレベルを考えると、現在の海浜よりいくらか湾が入りこんでいた程度で、そこまでは船が入りこんでいたが、谷の西奥深くまで入りこんでいたとは考え難い。

ともかく、この凹地が少なくとも近世以前には深い谷状地形を呈していたということを、重ねて指摘しておきたい。これは、中世の墓地の立地条件と関連があるからである。

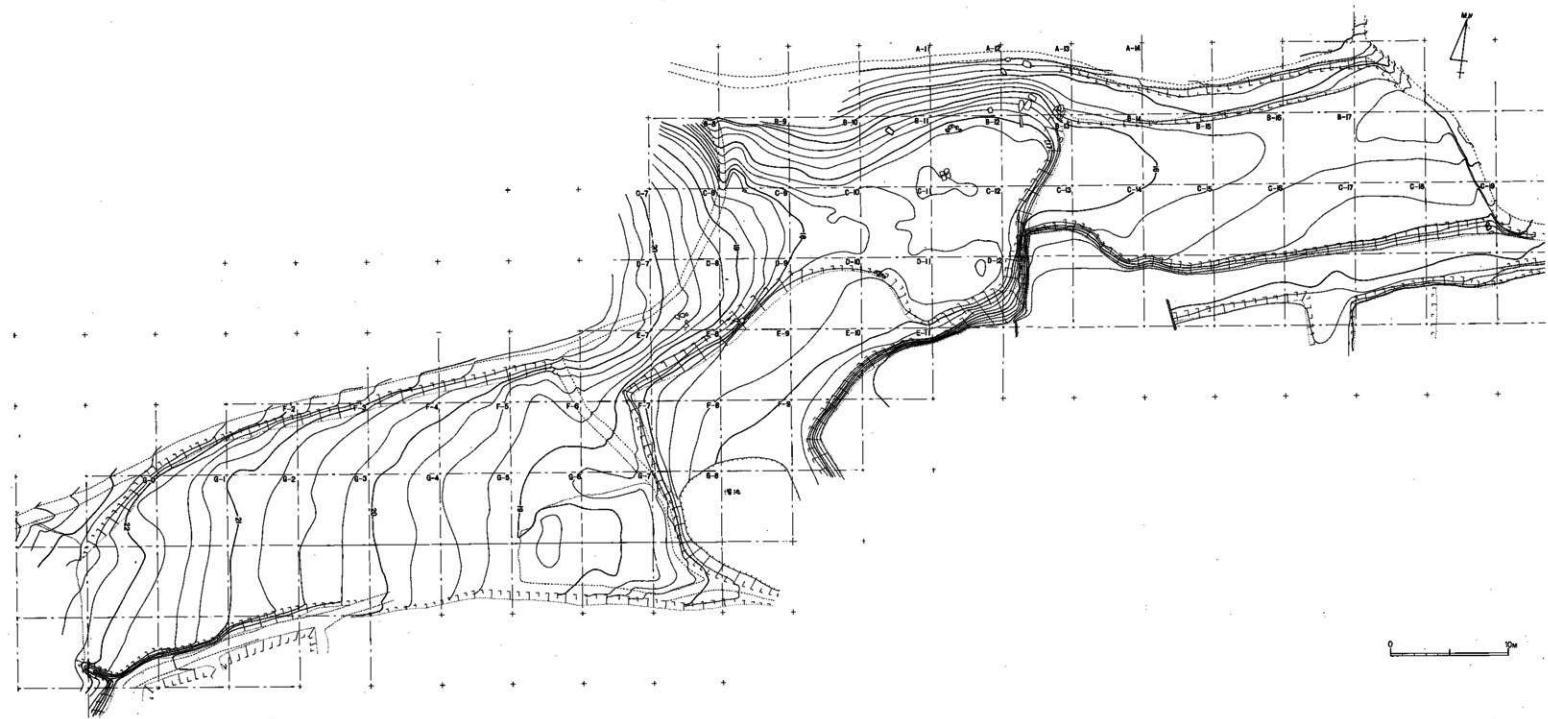
②東部平坦地は、地区割りではB・C-14～19区の部分である。この地区は標高約15m前後の平坦地である。予備調査の踏査・地形測量の結果では遺跡の範囲には含まれていなかったが、遺跡の範囲再確認のため発掘調査を行った。その結果、現地表下12～25cmで地山が現われ、遺構は検出されなかった。また出土した遺物も近代以降の陶器片ばかりであった。

③西部緩斜面は地区割りでは、G・F-0～6区の部分である。G-1区付近で標高約22mでG-6区付近では標高約19mで、西から東へ低くなるゆるやかな傾斜地である。この地区は、予備調査では遺跡の範囲に含まれていなかったが、再確認のため発掘を行った。

その結果、G区とF区の境目付近で地山が南東方向に急激に落ちこんで行くことが確認され、この付近も凹地部と同様、深い谷状地形をかって呈していたことが判明した。またE-6区で近世墳墓と思われる土壙が三基検出され、この近世墳墓群は西へ延びる可能性があり、G-1・2・3・4区の丘陵裾部を今後発掘調査する予定である。

④中心部は、地区割りではA～F-7～13区の部分である。ここから遺構、遺物が検出され、狭義の遺跡である。以下にのべる土層、遺物、遺構はこの地区的概要説明である。

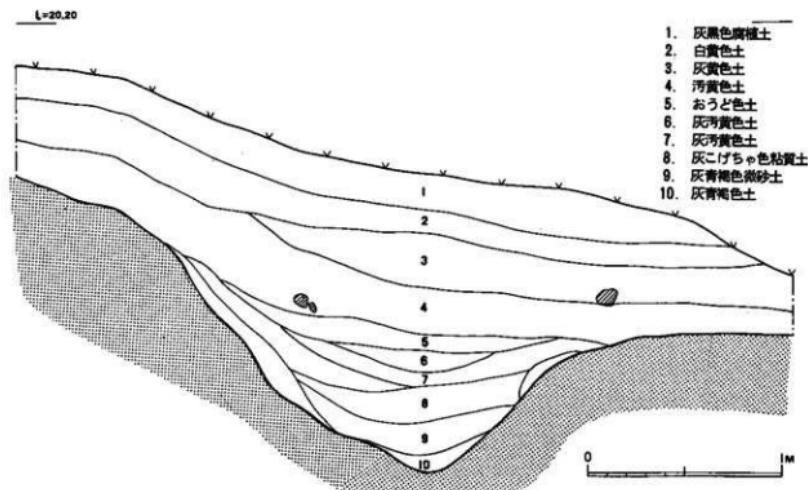
(大山)



第5図 がんど遺跡地形図・地区割り図

2 土層および本遺跡の時間的推移

本遺跡全体の土層と時間的推移を考えるに最も適した層序を示しているのは、B-8, C-8区にかけて掘られた溝状遺構の堆積状況であろう。



第6図 C-8区 溝状遺構層序図

表土から溝底部までの深さは溝中央部で計測すると 155 cm になる。これは 10 層に区分することができた。

各層の色調・土質を述べると次のような。

第 1 層は表土で灰黒色の腐植土で、土質は第 2 層と大差ない。

第 2 層は白黄色をしており、3~5 mm の石粒を含み、全体として柔かい土質である。

第 3 層は灰黄色を呈しており、第 2 層に比べて灰色ぼくなる。3~5 mm の石粒が多く、サラサラした感じである。この層には、拳大の花崗岩が入っているのが特徴である。

第 4 層は淡黄色土で石粒を含んでいるが、比較的木目の細かい土の堆積である。この層にも拳大の花崗岩が含まれている。

第 5 層は汚黄色土で、第 4 層に比べて少し汚れて薄黒くなっている。

第 6 層はおうど色で、木目の細かい土の堆積である。第 5 層に比べると灰色ぼくなる。3 cm 前後の花崗岩のバイ乱土と、炭の粒が含まれているのが特徴である。

第 7 層は灰汚黄色土で、1~3 mm の石粒が含まれている。

第 8 層は灰こげちゃ色を呈し、粘質をおびた土層である。

第 9 層は灰青かっ色を呈し、微砂粒の堆積土である。

第 10 層は灰青かっ色を呈し、この土層は灰青色の砂質土とかっ色の花崗岩のバイラン土が混合したものである。

次に各層からの出土遺物をみてみると、第 1・2 層には土師質土器の破片が少量含まれてい

る。第3層下半から第4層にかけて遺物が多く含まれていた。出土した遺物は龜山焼壺、常滑焼壺、土師質土器、銅鏡、輸入青磁などである。石仏は第4層下半から第5層にかけての層位から出土した。

第5~10層にかけては、磨製石器1点と土師質土器の細片が少量出土したのみである。

溝底部からは筒状土器が出土した。

各土層の特徴と遺物の出土状況から考えられることは、まず寺院造営時に道もしくは排水その他の目的のために地山を掘削してこの構造がつくられたと推定される。第10層の堆積は、花崗岩のバイラン土と砂質土の混合で、掘削からさほど時間が経過しない段階での壁土の崩壊と降雨などによる自然堆積土が混合したものと思われる。第9~7層は自然堆積で特徴がなく歴史的状況を読みとることは難しい。第6層には花崗岩のバイラン土塊が含まれ、これは地山の土が掘り返され、流れ込むような変化があったと推測される。木炭の粒が多いのは火災などの影響だろうか。人為的か自然的か不明であるが、いずれにせよ、この構造を取りまく環境に変化があったことは間違いないだろう。遺物の出土量が下層と変わらないことは、自然の環境変化の可能性が大きいように思える。第5層が堆積し終った段階では凹み部分は完全に埋没し、排水溝だとするとその機能を果たさなくなっている。

第4層に遺物が集中していた。龜山焼壺の破片は採集しただけで2/3個分あり、流出した分を考慮に入れるとほぼ完形であったと思われる。出土位置は東肩の上で径約1mの範囲に集中しており、原位置を保っていると思われる。また種類の異なる遺物があり、活発な人間活動が読みとれる。壺がつぶれ、物が捨てられ、石仏が転倒していることは、この段階で寺院が機能を停止し、廃棄されたものと推定される。

第3層は他の場所で部分的にみられ、第2・1層は全体に広がる堆積土である。 (大山)

3 遺 構

今までの調査で検出した構造は、石列1、溝状構造4、土壤7、石積み1、積み石1などである。まだ未発掘の部分が残っており、構造をすべて調査していないので、詳しい報告は明年度の機報にゆずることにする。

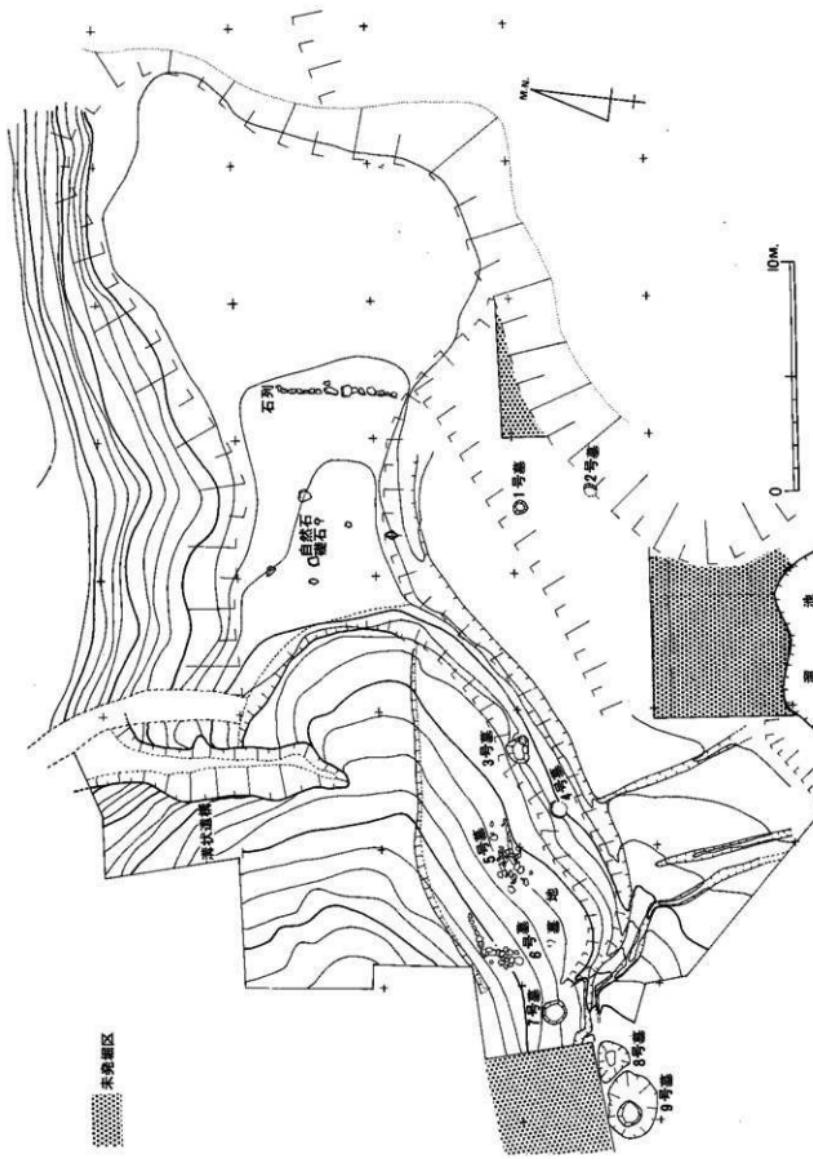
現在までに確認された中、近世墳墓を任意に番号をつけ、概要を一覧表にして掲げておくことにする。

(大山)

第1表 遺構一覧表

調査区	形態	径 cm	深さ cm	遺 物	図版番号	備考
1号墓	E-10	土 壤	53	25 備前焼壺、指輪、涅槃、土師質土器、鉄製品	15	備前焼壺は4号墓出土壺と接合
2号墓	F-10	"	58	20 土師質土器片		
3号墓	E-8	"	120	65 な し	12	
4号墓	E-8	"	84	37 備前焼壺	11	
5号墓	D-8	石積み	120×60+α	土師器片、人骨片	8, 10	
6号墓	D-7	石組み	150+α×80+α	備前焼壺、火葬人骨	8, 9	
7号墓	E-6	土壤桶棺?	130	77 近世陶器	13	
8号墓	E-6	"	164	80 な し	14	
9号墓	E-6	"	295	90 近世陶器(染め付け)	14	

第7図 がんば遺跡地形図・遺構配置図



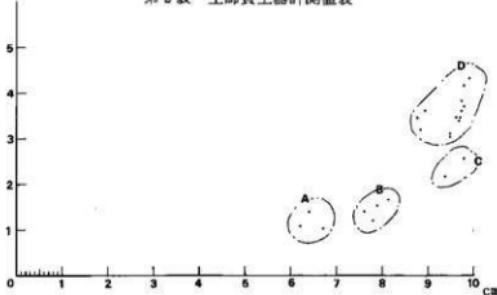
4 遺物

本遺跡から出土した遺物は、土器、土製品（土錐など）、石製品、鉄製品（鉄釘など）、および人骨である。発掘面積の割には少量である。調査がまだ終了しておらず、今回の整理期間も短かかったため、多くを報告できないが、整理が一応終った主な土器類と石製品類について報告することにする。その他の遺物については、明年度の概報に掲載予定である。

(1) 土器類

土師質土器は、皿、杯、碗、土釜などが出土したが、土釜は破片が約10点したにとどまった。皿、杯、碗類は約50個体分ぐらい出土した。C-9・10区から出土したものが多く、完形品も多い。次いでE-7・8区からの出土が多い。これは単一で完形で出土しており、墓の供獻物の容器に使用されたものと推定される。接合し復原できるものや、図上復原可能なものを25点図化した。このうち、器高、口径とともに計測可能な23点をグラフにしてみた。

第2表 土師質土器計測値表



その結果、4つのグループに分けることができた。

A グループは、器高1～1.5 cm、口径6.0～7.0 cm

B グループは、器高1～2.0 cm、口径7.5～8.5 cm

C グループは、器高2～3 cm、口径9.0～10 cm

D グループは、器高3～4.5 cm、口径8.5～10 cm

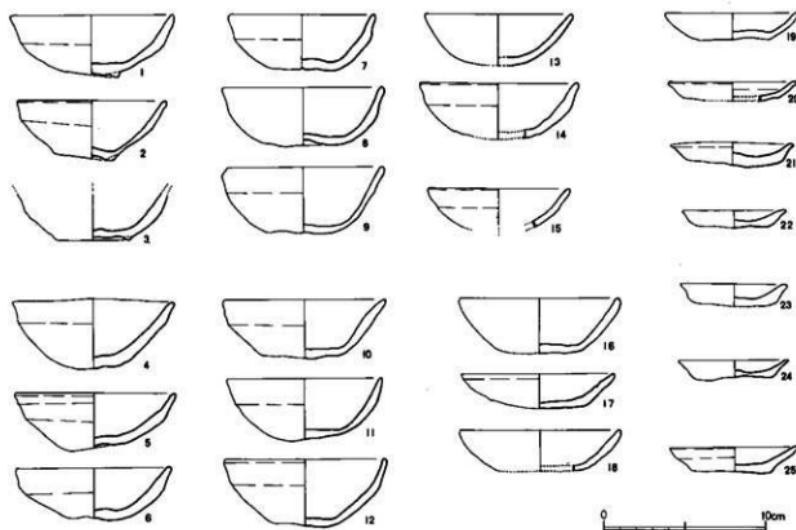
各グループに、小皿、皿、杯、碗の名称を付しておくことにする。

D グループの碗をさらに細かくみてみると、口径8.5～9 cmのグループと、9.5～10 cmのグループの2つに分かれるため再検討したところ、碗は口縁が必ずしも整円形を呈せず、橢円形を呈するものが多く、口径の小さいグループの3個体は短軸を計測した結果で、長軸を計測すると、口径の大きいグループに入ることが判明し、D グループの碗は器高3～4.5 cm、口径9～10 cmという法量内に納まる事になる。

次に法量をはなれて、各グループでの形態や製作技法についてみてみることにしよう。

A グループの小皿は、22・23・24であるが色調は肌色や赤味がかったかっ色をしているなど差はあるが、胎土には微砂を含み良選されている。焼成も良好である。23は観察不可能であるが、22、24はヘラ切り底である。

B グループの皿は、19・20・21・25で、25を除くと、色調、焼成、胎土は小皿と大差ない。切り離し技法は、20が観察不可能であるが、19と25が糸切り底で、21はヘラ切り底である。25



第8図 土師質土器実測図

は胎土は木目が細かく、焼成も硬く焼き上っており、他の土師質土器と著しく異なっている。さらに異なる点は、口縁部全周に燈明芯のこげ痕が残っており、内面に墨書きが認められることである。

皿、小皿類では、胎土、色調、焼成は大差なく、切り離し技法はヘラ切りが多いが、中に糸切り技法のものも確実に含まれていることと、25は胎土、焼成、色調が他のものと異なり、使用方法にも差異が認められることの2点を重ねて指摘しておく。

次に、Cグループの杯は17と18で、17はヘラ切り底で口縁部に燈芯のこげ痕が残る。16は器形を重視すると杯の分類に入るが、法量からみると碗の分類に入ってしまう。

Dグループの碗は、10～15で、底部の形から三つに細分できる。

D-Iは貼り付け高台のつくるもので、1～3がこれにあたる。

D-IIは底部中央を外から内に押し上げ、内面が盛り上っているもので、4～9がこれにあたる。

D-IIIは平底のもので、10～15がこれにあたる。

D-I、D-II類に共通する形態上の特徴は、これらの碗を水平な場所に置くと口縁の一端が低く、もう一端が高くなり、傾くのである。例えば、液体を入れた場合内法量より実際の容積が少し減るのである。

これが製作技法により生じた器形で、日常生活ではあまり支障がなく異和感を感じなかつたものか、それとも使用に際し何らかの必要からこういう器形がつくられたのかどちらかであろう。

そこで貼り付け高台のものを詳しく観察してみると、第9図に図化したように、高台が均等の高さに貼り付けられているのではなく、一端が高く、もう一端には粘土ひもが及んでいて、意図的にこのような高台を貼り付けたように思える。どのような用途のため、このように傾く碗を製作したのだろうか。

さて、次に陶磁器類をみてみることにする。

陶器類は、土師質土器について出土が多かった。器種は、甕、壺、すり鉢、こね鉢などである。国内産のものばかりで、輸入品は青磁片が数点出土したにとどまった。

第10図の1は、備前焼壺で、ほぼ完形である。E-7区から倒れた状態で出土した。内には人骨と土がつまっていた。口径10.6cm、器高25.3cmで、胴部最大径は、中央やや上にあり20.1cmを測る。口縁部は折り返され玉縁になっている。肩部に3本のヘラ沈線がめぐる。色調は黒かっ色を呈するが、肩部は自然釉と肌荒れで白っぽくなっている。内面は横方向のハケ目が緻密に走っている。

2は、土師質の片口鉢である。E-7区の出土で、1の壺を除去した直下から破片が多く出土した。接合しほぼ完形となった。

口径14.7cm、器高5.7cmである。薄緑がかかった灰色を呈し、微砂粒を多く含む胎土である。焼成はあまり。内外面ともロクロナデで、底部は糸切り底である。

3は、土師質の鉢である。E-10区の1号墓に入っていたものである。底部と体部上半まで接合できたが、口縁端部は破片が1点あったのみで、器高、口径とも推定復原である。

底径10.0cmで、器高は約12cm、口径約26.5cmと推定される。黄味がかかった灰色を呈し、胎土は石粒を多く含み、さくさくした感じである。瓦質に近い焼き上りである。

4は摺鉢である。備前焼であろう。E-10区の1号墓に入っていたものである。5cm幅ぐらの破片であったが、口縁部から底部までの破片であったため図上復原できた。復原値は、口径28.6cm、底部16.0cm、器高12.7cmである。体部上半に4本のヘラ沈線がめぐる。内側には6本1単位とする櫛描き状沈線が施されている。内外面ともロクロナラで、黒かっ色を呈し、胎土には1mm前後の石粒が多い。焼成は緻密である。

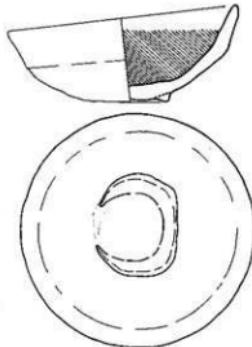
5は、常滑焼の甕であろう。B-8区の溝状造構の第4・5層から出土した。破片の出土で図上復原した。口径は45.6cmである。口縁部は外反し、端部をおりまげ、上下にのばしている。肩が張り、体部は底に行くにしたがい急激に細まるようである。肩部に印花文が施されている。茶かっ色を呈し、胎土には石粒を多く含む。

6は、亀山焼甕である。C-8区の第4層から破片がまとまって出土した。

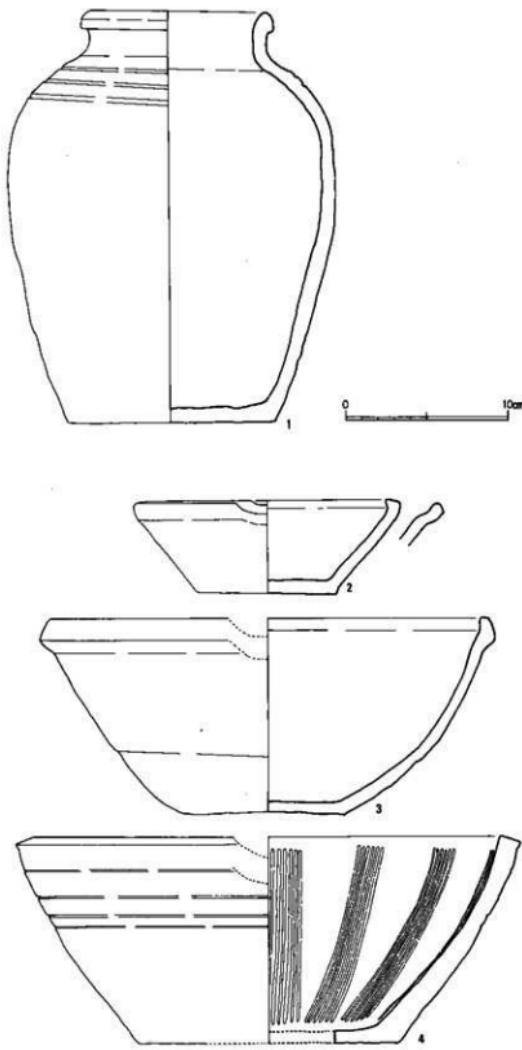
口径32.4cm、底径21.2cm、器高38.8cmである。口縁部は大きく外反し、胴部は丸味を帯び、胴部最大径は中央部にある。胴部内面は同心円たたき目後ナテ調整、外面は格子目のタタキが残る。内面は肌荒れが目立つ。灰黒色を呈している。

7は、備前焼の甕である。E-8区を中心に隣接する区に破片が散乱していた。図上復原である。

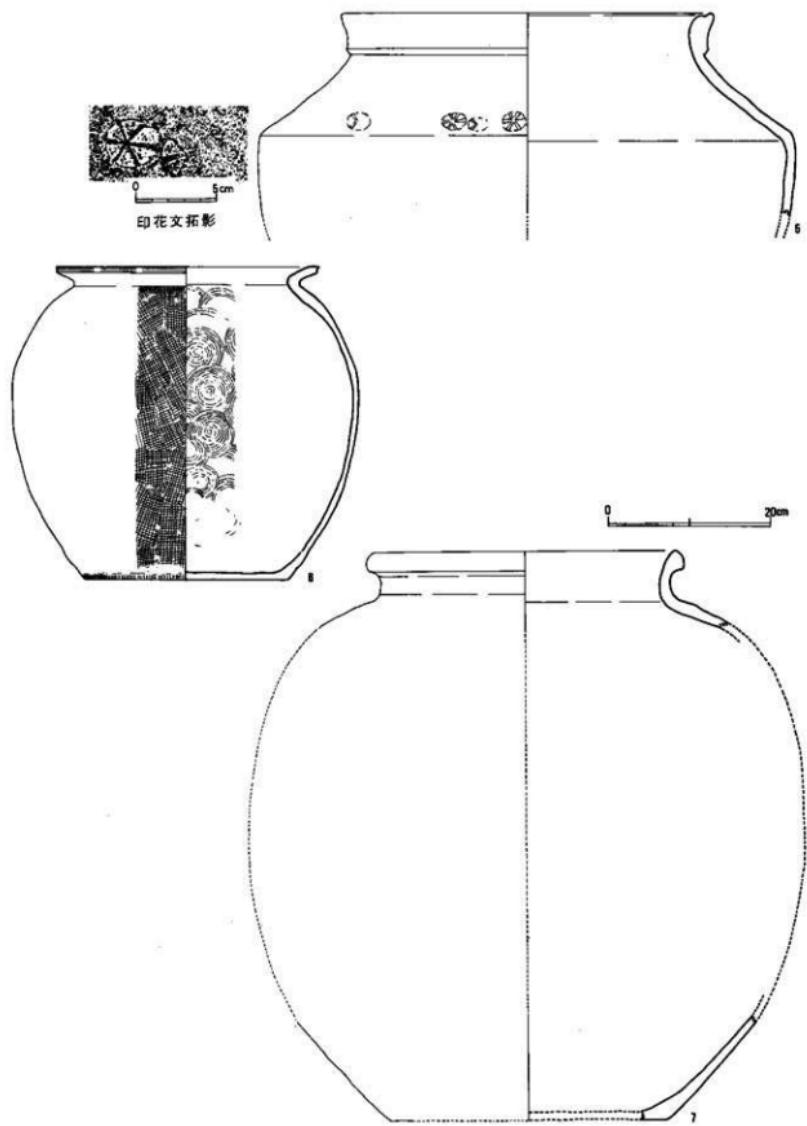
口径37cm、底部34cmである。口縁部は外反し、端部は折り曲げられ玉縁状を呈する。口縁部内外面はロクロナデで、体部内面はナデ、面はハケ目調整である。体部外面下部はヘラケズリがなされている。内面はナデている。



第9図 土師質碗実測図



第10図 陶器実測図(1)



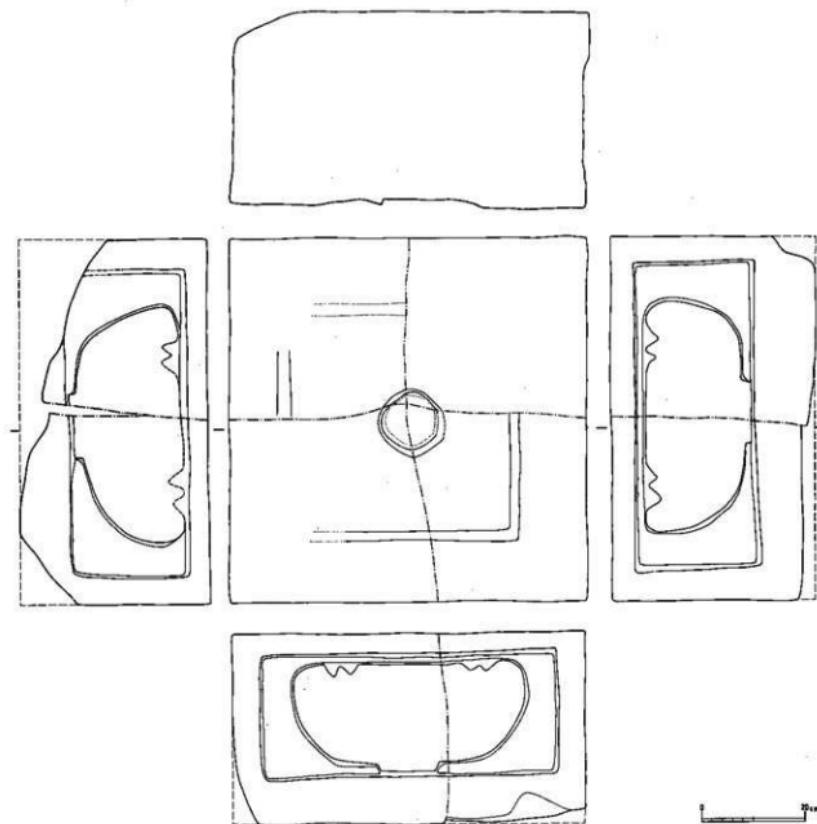
第11図 陶器実測図(2)

(2) 石製品類

石造遺物は、石塔基層・石仏・五輪塔が出土しているが、いずれも崩壊散乱、もしくは埋没しており確実に、原位置を保っていると言えるものは、1点もなかった。

1 石塔（第12・13図）

調査区B-12において、石塔基礎石が4分割された状態で放置されていた。この基礎石が、古地名として残る「石の塔」に関係していると思われる。



第12図 石塔基礎実測図

石材は、花崗岩が使用されており、上面は1辺約70cmで、ほぼ正方形をなす。中央部は径約10cm・深さ約1.5cmのホヅを持っている。かすかな痕跡ではあるが、ホヅを囲む巾約1cm、1辺約46cmのほぼ正方形の溝を見ることができる。側面は、高さ約36cmを計り、正面・左右側面に格狭間を持っている。格狭間は、最大巾約44cm・高さ約20cmを計り、左右に張りだし、最大巾を上部に持っている。この格狭間は、「弘安元年戊寅三月日（1278年）」の銘がある、白峰寺十三重塔東塔格狭間よりやや小型ではあるが、よく似た形態を持っている。（注-1）

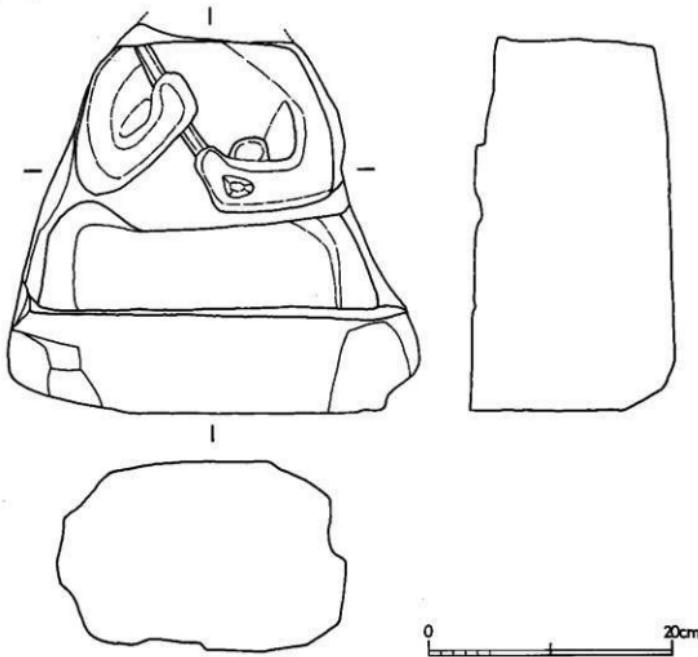
この石塔基礎上部が、なにであったかは知ることができないが、層塔もしくは宝塔であったと思われる。（注-2）



第13図 白峰寺十三重塔西塔実測図

2 石仏（第14図 図版33）

石仏は、調査区B・C-8の地山面を南北にカットする溝状造構、東側斜面凹み部より正面を地山に向けて出土した。



第14図 石仏実測図

石仏は、肩より上部が壊れており、全体の大きさを知ることは出来ないが、残部は全高32cm最大巾34cmを計り、高さ8.2cmの台座を持つ坐像である。右手に錫杖、左手に宝珠を持っている。前面後部に光背を意識したらしい個所が見られる。背面部に、巾11cmで上端より下端にかけて、自然面を残している。自然面は、意識的に残し背部を何かに、立てかけていたのではないかと思われる。台座部および背部には、ノミ痕を見る事ができる。

この石仏は、右手に錫杖・左手に宝珠を持つところから、地蔵菩薩ではないかと思われる。

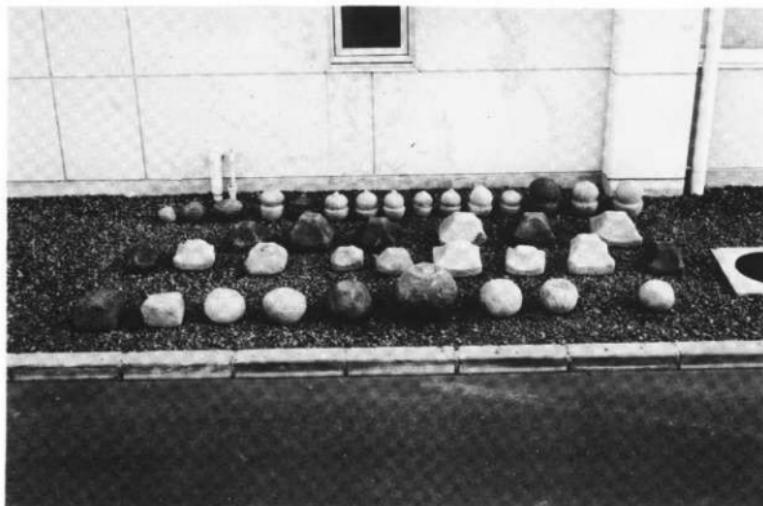
3 五輪塔

五輪塔は、空・風・火・水・地輪と各輪すべて出土しているが、バラバラに散乱しており、一つとして組み合されて出土したものはない。五輪は総数40点出土しているが、その大半は、空・風・火輪であり水・地輪は、極端に少ない。

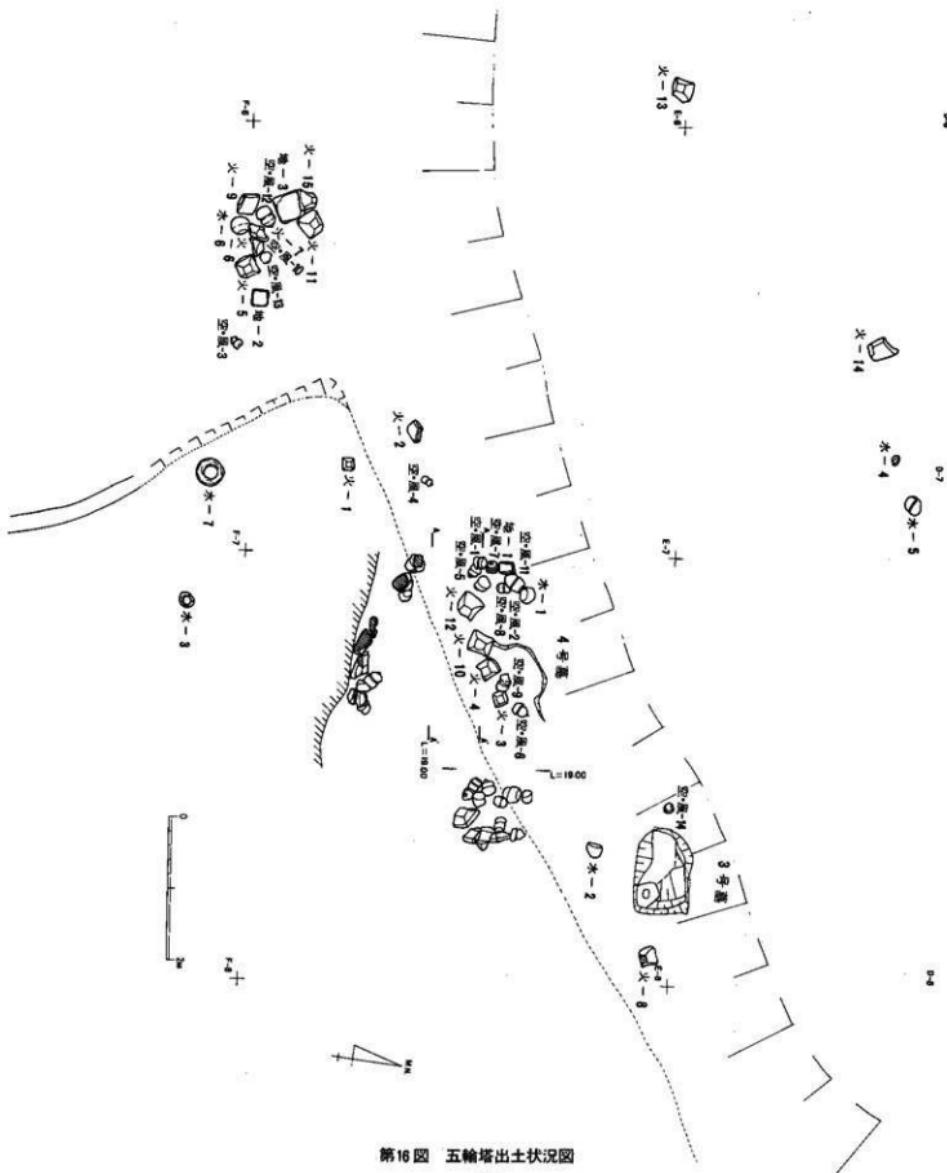
五輪の出土状態は、調査区E・F-7において露出していたもの、E-8区南斜面部周辺に埋っていたグループに、大別する事ができるが、空・風輪の1点(空・風-10)はC-9区北西隅より、他のものとは離れて1点だけ出土している。出土した五輪の石材は、花崗岩を使用している。この為か各輪共に、風化を強く受けている。

出土五輪のどれからも、銘・梵字などの刻字は見ることが出来なかった。刻字は、風化作用の為に見えないのでなく、製作時から刻まれてなかったと思われる。

五輪塔製作時期については、刻字がないために時期を確定することは、難しいので今後の研究を待ちたいと思う。



第15図 出土五輪塔



第16図 五輪塔出土状況図

(1) 空・風輪 (第 17・18 図 図版 31)

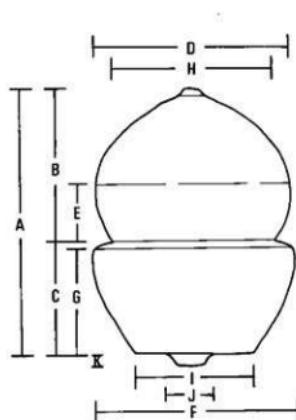
がんど遺跡の空・風輪は、総数 15 点出土しているが、出土中 3 点は、空・風輪のつなぎ目で壊れている。空・風輪はすべて、1 石で造られており、梵字等刻字は見ることが出来ない。

空輪は側面を、丸く作られてはいるが、やや梢円形になっているものが多く見る。先端突出部は立ち上がりが、なだらかなもの (1・12 等)、急激なもの (3・6 等)、見ることが出来ないもの (3) に、分類することができる。これらの変化は、風化の影響を多少受けているかも知れない。空輪巾最小は、13.6 cm (2)、最大は 21.9 cm (2) であり、空輪巾は空・風輪高にはほぼ比例している。

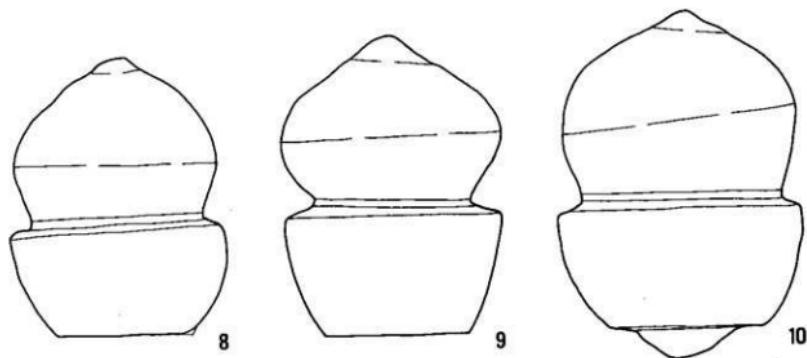
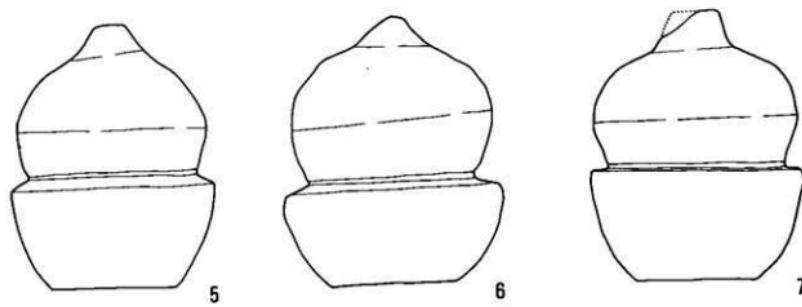
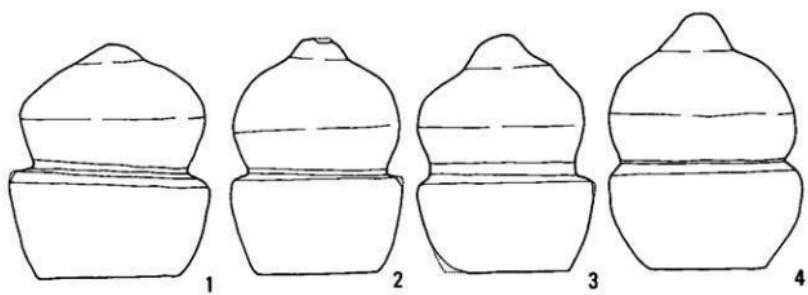
風輪は、空輪との境目が斜めに立ち上がり、下部に向ってそぼまつて行く。底部は平坦なものが大半であるが、10・12 はホヅを持っている。ホヅ断面は、半円をしめし 10においては、径 8.8 cm 高さ 2.5 cm を計る。(2) は、ホヅが壊れており痕跡を残すに、すぎないが、形態は 10 と同じであると思われる。風輪最大巾は、空輪に向け斜めに立ち上がる所にあるが、(1・11・12) は、やや下がった所に最大巾が移り他とは、ややちがった形態を示す。巾は最小 13.4 cm (2)、最大 21.5 cm (2) を計る。これらも空輪同様、空・風輪高にはほぼ比例している。空・風輪は、前記したように、一石で製作されており空・風輪高は、最小 19.4 cm (1・2)、最大 29.9 cm (2) を計るよう難多である。

空・風輪を形態で分類すると、第 I 形式として、空輪上端突出が、なだらかなもの (1・8・10~12・14)、第 II 形式として突出が急激なもの (2~7・9)、第 III 形式として突出が見られないもの (3) と分類出来る。第 I 形式はさらにホヅのない 1・8・11・14 を第 I 形式-A ホヅのある 10・12 を第 I 形式-B とする。空・風輪の形態を、第 I 形式-A から第 III 形式まで 4 形式に分類したが、第 III 形式は、他に類例をみないため、今後検討の必要性がある。

第 3 表 空・風輪計測値表

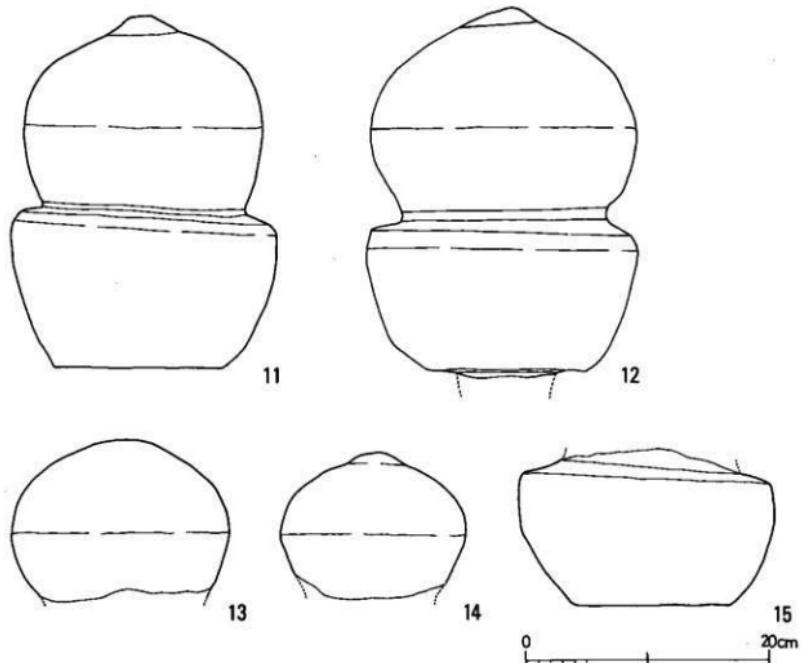


	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	備考
1	19.4	10.6	8.8	15.5	4.4	15.4 + - a	8.4	12.7	11.6			
2	19.4	11.1	8.3	13.6	3.8	13.4 + - a	7.8	11.5	9.8			
3	19.5	11.5	8.1	13.6	4.1	14.6	7.3	12.0	11.0			
4	21.2	12.4	8.8	15.2	4.2	15.8	8.0	13.5	9.6			
5	21.8	12.6	9.2	15.2	3.8	16.8	8.2	13.8	10.2			
6	22.1	13.6	8.5	16.5	5.1	17.3	8.2	13.5	10.5			
7	22.3	12.9	9.4	16.8	4.2	17.4	9.2	14.8	10.1			
8	22.8	13.5	9.3	16.6	4.8	17.3	8.5	14.2	11.1			
9	24.7	14.0	10.7	18.1	5.8	17.6	10.0	13.3	12.7			
10	26.0	15.7	10.3	19.4	6.5	20.0	9.6	16.6	12.7	8.8	2.5	ホヅ あり
11	29.0	16.0	13.0	19.8	7.0	20.8	12.4	17.0	14.0			
12	29.9	17.6	12.3	21.9	6.5	21.5	11.4	17.0	13.0	8.2	0.4 + - a	ホヅ あり
13			13.2 + - a		17.9							空輪 のみ
14			12.4 + - a		15.2							空輪 のみ
15						20.4	10.5	14.5	12.8			風輪 のみ



0 20cm

第17図 空・風輪実測図



第18図 空・風輪実測図

(2) 火輪 (第19・20図 図版32)

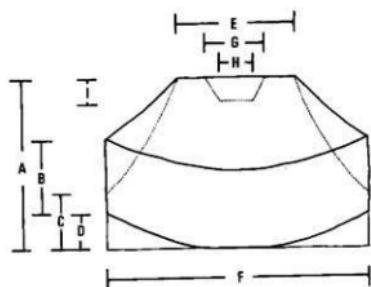
火輪は総数15点出土しており、形態を見るとホゾ穴があるもの8があるが、他のものは、特に変った形態を示すものは、見受けられない。軒は端になるにしたがって、上方に反り厚みをましてくる。軒の反り方は、中央部より軒端にかけて、なだらかな反りを示すもの(2・5等)軒端に近づいて急激に反るもの(1・3等)に分けることができる。また屋根より軒端にかけての流れも、直線的に軒端近くまでおり急に反るもの(1・5等)、ゆるやかな反りを示すもの(2・3等)に分けることができる。火輪高は、最小3.7cm(1)、最大21.9cm(15)を計り、上端部最大巾は、最小8.3cm(1)、最大14.4cm(12)、下端部最大巾は、最小21.2cm(1)、最大32.2cm(14)であり、上端巾、下端巾は、全高にはほぼ比例している。ホゾ穴を持つものは、前記のとおり8だけでありその断面は、逆台形をしめし径7.4cm・深さ4.1cmを計る。

火輪の形態を分類する基準には、軒の反り・屋根から軒端への反を考えるとき、第Ⅰ形式として、軒が中央部より軒端にかけなだらかな反りを示し、屋根より直線的に軒端近くまでおり急に反るもの(5・9・12・13)、第Ⅱ形式として、軒は第Ⅰ形式と同じで、屋根より軒端にかけてゆるやかに反るもの(2・8・10・11)、第Ⅲ形式として、軒の反りが、軒端に近すぎ急に反り、屋根より直線的に軒端近くまでおり急に反るもの(1・7・15)、第Ⅳ形式として、

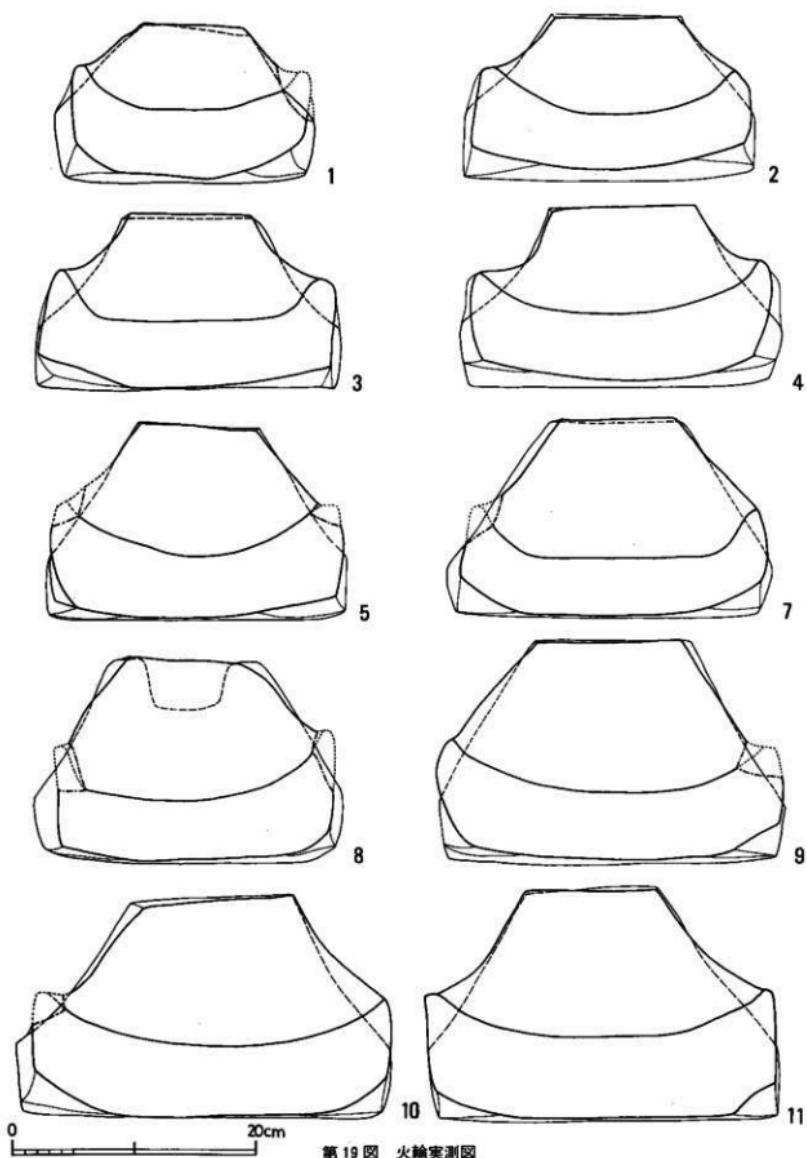
軒は第Ⅲ形式と同じで、屋根より軒端にかけてゆるやかに反るもの（3・4・14）と分類することができる。

第Ⅱ形式は、さらにホヅ穴のない2・10・11を第Ⅱ形式-A、ホヅ穴のある8を第Ⅱ形式-Bとする。

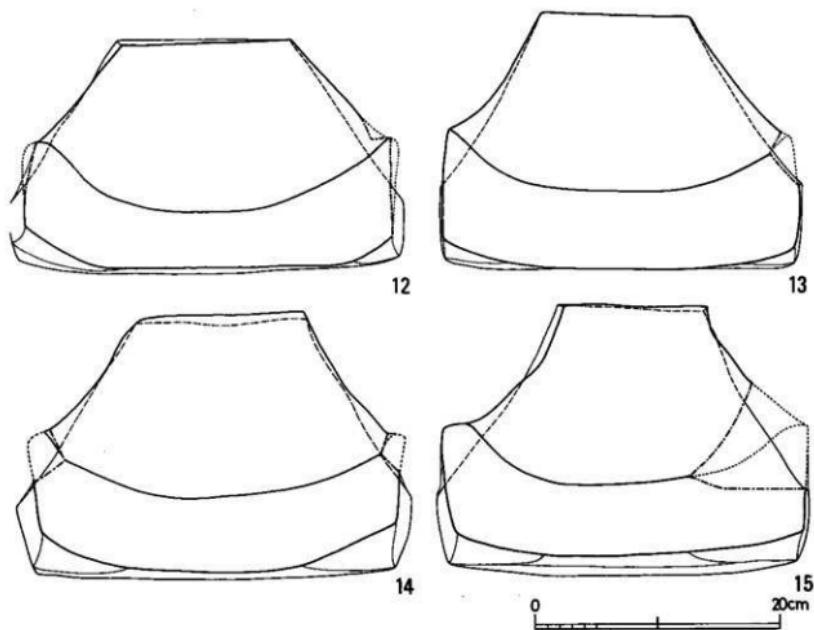
第4表 火輪計測値表



No.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	備考
1	13.1	6.6	5.9	3.3	8.3	21.2				
2	13.5	6.4	5.2	3.0	10.4	24.0				
3	14.5	7.0	4.8	3.2	10.8	24.9				
4	14.7	7.7	5.6	2.5	11.9	26.2				
5	16.3	5.8 ₊ _a	5.2	2.0	9.8	24.7				
6	16.4				11.1 ₊ _a	26.7 ₊ _a				
7	16.5	6.2	4.0	3.4	11.2	26.6				
8	17.0	4.5 ₊ _a	4.5	2.7	11.4	25.4	7.4	5.2	4.1	ホヅ穴有り
9	18.0	8.8	5.2	1.4	12.5	28.4				
10	18.4	6.5	6.3	4.0	13.1	30.5				
11	19.2	7.7	6.2	3.0	10.8	28.8				
12	19.2	8.3	4.8	3.8	14.4	32.2				
13	21.2	8.9	7.0	2.7	12.0	29.6				
14	21.9		6.7	4.6	14.0	32.4				
15	22.3	9.0	6.8	3.6	11.9	30.5				



第19図 火輪実測図



第20図 火輪実測図

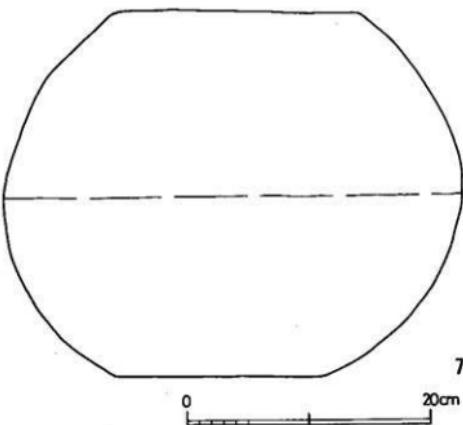
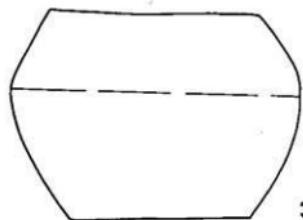
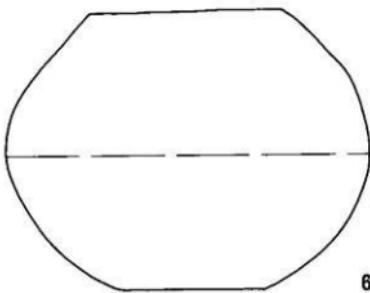
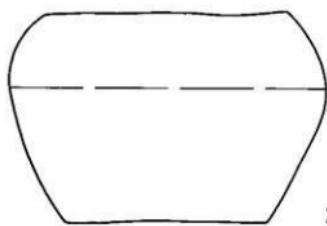
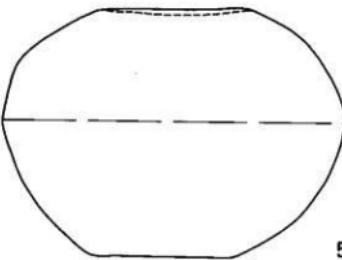
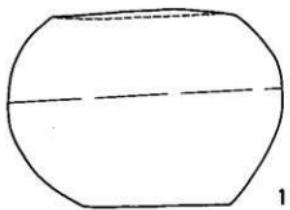
(3) 水輪 (第21図 図版33)

水輪は7点出土しており、形態はごく普通に見られる水輪同様、上端巾が広く、下端巾が狭くなっている。水輪高は、最小16.2cm(1)、最大30.2cm(7)を計り、最大巾は、最小22.7cm(1)、最大37.4cm(7)を計る。最大巾は、空・風・火輪同様ほぼ全高に比例する。

水輪を形態分類する基準を、最大巾が全高に対してどの位置にあるかとすれば、第Ⅰ形式として、最大巾が中央部より上方にあり、上端に近すぎやや肩のはるもの（1～5）、第Ⅱ形式として、最大巾がほぼ中央にあり、上端から下端にかけ、同一の弧円を描くもの（6・7）と、2形式に分類することができる。

第5表 水輪計測値表

第5表 水輪計測値表				
A	B	C	D	E
16.2	9.0	23.7	15.2	11.9
17.3	13.0	26.0	16.9	16.5
17.6	10.4	25.9	17.1	14.8
17.9	10.0	25.2	16.7	15.8
20.8	11.2	26.1	15.7	11.0
23.5	13.0	26.8	15.4	11.7
30.2	15.0	31.4	19.9	17.0

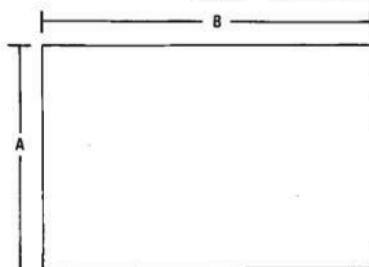


第21図 水輪実測図

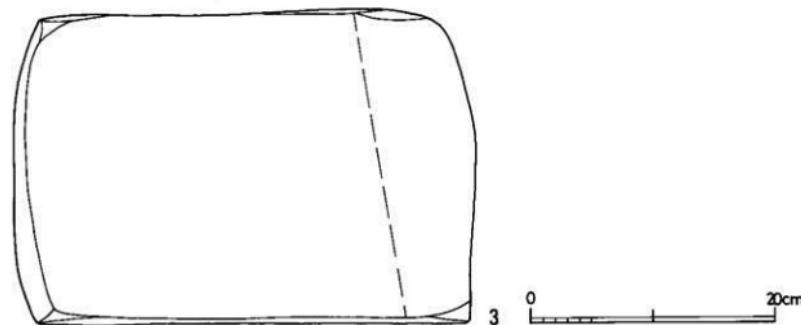
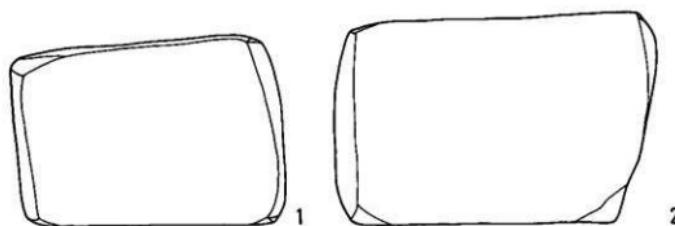
(4) 地輪 (第 22 図 図版 33)

地輪は 3 点出土しており、形態はごく普通に見られる地輪同様に、側面は長方形をなし、上面はほぼ正方形に近い。地輪間の形態的な差異は見とめられず、型の大小を見るだけである。全高は、最小 15.6 cm(1), 最大 25.8 cm(3) を計り、最大巾は、最小 22.2 cm(1), 最大 38 cm(3) を計る。

第 6 表 地輪計測値表



No	A	B	備考
1	15.6	22.2	
2	17.3	26.3	
3	25.8	38.0	



第 22 図 地輪実測図

さて、各輪を形態による形式分類をしてみたが、これらが時間的な差を表現するものであるか、ただ単に形態の違いを表現するものかは、今後の研究を待ちたいと思う。また分類を行った基準についても、再度検討の必要性があると思う。

(大砂古)

注-1

重要文化財白峯寺十三重塔修理工事報告書

白峯寺 1963年3月

注-2

石塔基礎上部については、五重塔であったとの話しを聞くことができた。石塔位置も放置されていた位置よりも西であり、調査区B-8付近であったらしい。

注-3

水・地輪が極端に少なくなっているのは、ガンド五輪塔が樅石島において、信仰の対象外になり、崩壊後に石垣等他に転用されたと思われる。

注-4

火輪は絶数15点出土しているが、6は実測不可能なために、第18図にはない。

参考文献

日本石仏事典 庚申懸話会編

雄山閣 1975年12月

石仏入門 日下部 朝一郎

国書刊行会 1967年11月

新版仏教考古学講座 第三巻 監修石田茂作

雄山閣 1976年5月

IV まとめ

今までの調査結果をまとめておきたい。発掘調査はまだ継続中のため、現在までに知りえたことや、これから調査に必要と思われる点を備忘録的に記しておくことにする。

予備調査の結果から、本調査に際して3つの課題が提示されていた。

それは、①凹地部分の旧地形の復原。②石の塔平坦部北東隅にある板石が、箱式石棺か否か。③石の塔周辺の遺跡の全容解明、の3点である。

①の点に関しては、調査の概要の項で述べたように、地形図から判断されるより幅広く、深い谷状地形をなしていたことが判明した。

現在、墓地域の南側で調査が進行しており、より詳しいデーターが得られるであろう。これは単なる地形復原という作業にとどまらず、後述する中世墳墓の立地条件に有効な視角を与えることになった。

②の箱式石棺か否かについては、確たる資料は得られなかった。板石は、平坦部の北東隅B-1B区と、斜面のA-B区にあった。約110×50cm大の板石で5枚散乱しているが、そのうち

1枚は立った状態にある。残り4枚は斜面の表土の上に転倒しており、明らかに移動した状態にある。この付近から6世紀後半の須恵器片が3点ほど出土した。その他の古墳時代の遺物は、D-11区で5世紀末前後の片が1点出土した以外は、出土していない。須恵器片の出土を重視すると、箱式石棺材との解釈も可能になるが、板石の現在の状態や位置からみて原位置を保っているとは考えられない。一方、石棺材以外の用途を考えてみると、多重塔の基壇の用材の可能性が考えられる（第13図参照）。今回の調査の限りではいずれとも結論を下すことは難しいが、この島における古墳の分布は東海岸付近で、立地から考えると、後者の可能性を考えた方がよいように思える。

次に、今回の調査の中心になった③の課題について述べておこう。

がんどう遺跡の性格は中世の寺院・墳墓跡である。このがんどう遺跡のある樅石島は、塩飽諸島の1つに数えられている。塩飽諸島は中世には所謂塩飽海賊衆の根拠地であったらしい。

この海賊衆は、鎌倉後期以降活発な動きをみせ、室町時代には沿岸の守護大名と離合をくり返す中で、身分的にも、経済的にも勢力をもってきたものと思われる。

このような時代背景のもとに、この遺跡はつくられたものと推定される。

さて、この遺跡を中世寺院跡としたが、ここで再めて寺院跡としてもよいかどうか検討を行ってみよう。

「がんどう」は「伽藍堂」の転化と思われ、「しゃかのもと」「さいのかあら」「どうのうら」など仏教に関連する古地名がこの付近には多く残っている。

寺院のことを「伽藍」と表現する例は、「今昔物語」をはじめ多くの文献に散見することができる。

一般に、寺院とは僧が居住し、仏をまつり、仏法を修する堂宇のことを言うが、堂宇と呼ばれる建物が存在したか否かがまず問題となろう。

調査の結果、C・D-10区で南北に走る石列を約6m検出した。この石列は西に面を描いていることから、石列東側に建物を想定することが可能である。また、C-9・10区で花崗岩の平坦な自然石を5～6個検出した。それぞれの石の距離や方向に規則性がなく、建物の礎石とするには多少のちゅうちょを覚えるが、今回の調査では自然石はかなり多く検出されたが、それらは斜面におしやられたような状態がほとんどであった。しかしC-9・10区の石は、平坦部に平たい面を上にしており、石列のそばにあることから原位置は多少動いているが、建物の礎石であったと積極的に評価しておきたい。

瓦は、D-12区で新しい遺物に混って数点出土したのみで、土師質土器や甕などが出土した2～3層からは出土しておらず、この建物には瓦が葺かれていたとみた方がよからう。

この建物がある場所は、西から延びてくる尾根をカットし造成されており、約800m²の面積がある。土盛りはないようである。この平坦地には、普通の中世遺跡で見られる土坑などが多く、常時人間が居住していたとは考えずらい。出土遺物は、椀や皿など供膳形態のものが多く、土釜などの煮沸形態のものが少ないことも、このことを暗示している。年数回、供養の際に人が集まり利用された御堂のような建物であったのだろう。

さて、次に墓地に移ろう。墓地は、平坦地の南西方向、尾根の南斜面につくられている。

現在までに遺構として確認できた墓は9基であるが、今後南斜面の発掘が進むと増加する可能性もある。形態は土壙、石積み、石組み、藏骨器と多様性に富んでいる。1～6号墓はほぼ同時期と思われるが、1・2号墓付近に五輪塔ではなく、3～6号墓付近に五輪塔が散乱してお

り、五輪塔は15基以上あったと思われるので墓塔として置かれたものよりは供養塔として置かれたものの方が多かったようである。7~9号墓は地山を数十cm掘りこんどおり、近世陶器片や染付片が出土し、1~6号墓と比べると、土壙の掘り方や遺物が異なり、また付近から五輪塔も出土せず、時期差があるようで、今後の検討が必要になってきた。

この墓地で中心的な墓は6号墓であろう。6号墓はL字状に残る石組みと、石組みのすぐ南で検出した蔵骨壺で、元来方形に囲んだ石組みの中に骨壺が安置されていたものと推定される。第12図の基礎石は元はこの6号墓付近にあったとのことで、元来この墓に伴ったものと推定される。今後このような多重塔をつくりうる階層を他県の類例から導き出し、文献資料とともに考察していくと、当時の墓制のみならず、海賊衆の社会構造にも迫りうることだろう。

6号墓の出土人骨については、県警の鑑識課に鑑定を依頼した。結果は付載の鑑定書のとおりである。鑑定結果を考古学的にみていくと、焼骨ということは、洗骨葬ではなく火葬骨を意味している。そして一体の骨ということは、改葬が認められず、一体火葬・一体埋葬したものであろう。20~30才前後という年令は、歯の消耗度からみた現代の法医学的な鑑定である。そこでまず暦年令を検討してみると、中世と現代とでは食物は、米雜穀⁽¹⁾、魚鳥獸肉・野菜と大差なく、料理法に多少の差異が認められるだけで、歯の消耗度に与える影響は少なかろう。すると暦年令に時期差を加味する必要はなくなる。次に機能年令であるが、中世は一世代30才とみるのが普通であるから、30才前後という年令は、当時の社会で中心的に活躍する世代に属することになる。火葬に付され、壺に納められ、丁重に埋葬されているところをみると、当時身分的に上位に位置していた人物であったのだろう。

香川県内での中世墳墓の調査例は極めて少ない。対岸の玉野市や倉敷市での類例が報告されている。それらは備前焼の壺や日用雑器を藏骨器として利用したもので、五輪塔との共伴も多い。⁽²⁾当時火葬が広く普及していたと見てよいだろう。そしてこれらの墳墓に共通していることは、いずれも比較的大きな谷を背後にひかえて、当時の海岸線近くに位置しているとの指摘がある。

がんどう遺跡の墓地も前述したように、深い谷地形に接し、海岸線にも極めて近い。

立地条件に共通性が見い出せるが、ここで考慮しておかなければならないことは、このような立地条件が当時の仏教思想や葬送儀礼にもとづき、積極的にこのような土地が選択されたものなのか、それとも逆に墓地というだけがれを日常生活に入れないために、当時の住民の日常生活空間の枠外に墓地をもうけたため、似たような土地条件のところになったという偶然の一一致によるものなのかということである。他地域の資料も検討し、将来再めてこの問題について考えてみることにしたい。

墓に関してもう1点述べておきたい。それは、1号墓の土壙の壁面に使用されていた備前焼甕破片と、4号墓の土壙壁面に使用されていた甕の破片が接合したことである。つまり、元は同一個体の甕が、破片として2つの墓に分離転用されていたのである。1号墓と4号墓は水平距離にして約14m離れており比高は約1.5mである。1号墓にはこの甕の破片の他、すり鉢・こね鉢・土師質椀のそれぞれの破片と鉄製品、川原石が入っていた。一方4号墓は、この甕破片のみであった。4号墓の付近には五輪塔が散乱しており、元来塔があったと推定できるが、1号墓の周辺からは五輪塔は1点も出土しなかった。同一の甕の破片を利用しながら、占地や内容に差異が認められる。これにはいろいろな解釈を下すことができると思う。考察は次年度の概報に譲ることにしたい。

さて、最後に出土遺物について述べておくこととする。

今回の調査で五輪塔が多く得られたことは大きな成果である。県内には多く五輪塔を見ることが出来るが、いずれも花崗岩でできており風化が著しく、路傍にうち捨てられているのが現状である。今回時期が特定できる資料が得られ、分類も行われ研究の緒端が開かれたことになる。今後この方面的研究が進み、路傍の塔にも保存の手がさしのべられることを期待したい。

土器類は土師質碗と陶器が多く得られた。土師質碗は、県内陸地部ではまったくないといつていい程出土しない器形である。この器形は山陽地方にみられる器形で、中世には、櫛石島は山陽地方の物品流通圏に入っていたのであろう。

陶器類は備前焼・常滑焼・亀山焼などが得られた。備前焼や亀山焼は県内陸地部からも出土がみられ流通していたことは知られていたが、今回ともに完形品が得られ、今後の研究に役立つことだろう。常滑焼は県内で初めての出土である。今後県内陸地部にどれくらい流入していくか焦点になろう。現在櫛石島の南5kmにある与島で鎌倉時代と思われる塩浜遺跡が発掘中である。ここで日用雑器についてどのような資料が検出されるか興味深い。なお県内の日用雑器の様相については別稿で述べておいた。参照されたし。

次に、これらの出土遺物からこの遺跡の年代についてふれてみることにしよう。

土師質碗は高台のつくもの、平底のもの、底部を外から内につき上げているものの3種がある。碗でこの3形態がみられるのは、草戸千軒町遺跡の編年によると14世紀である。

備前焼の壺は、口縁部は玉縁になっており、肩部にはヘラ描き沈線がめぐる。灰色の壺の破片がみられる。罠鉢は口縁部がわずかに上下にふくらむ程度である。これらの特徴はⅢ期のもので、鎌倉後期の年代が与えられる。

(6) 常滑焼は口縁部の形態からⅣ期(鎌倉時代末～室町時代初期)に比定することができる。

いずれも鎌倉後期へ室町初期の年代を示し矛盾しない。本遺跡の年代は鎌倉後期～室町初期ということになる。

ところで、中世の瀬戸内海の歴史というと中国側と四国側の守護・地頭・守護大名の動向を中心となり、これに付随するかたちで悪党、海賊衆のことが述べられるのが常である。これももとより歴史にはかならないが、瀬戸内海には幾多の島が散在している。島には島それぞれの歴史が存在するはずである。がんどう遺跡のある櫛石島は記録にまったくといっていい程その名を残していない。塩飽海賊衆の根拠地の塩飽諸島と表現されるだけで、歴史不在の島であった。文献史料を利用する限り、限界があるのは否めないが、かといって無意識のうちに島個別の歴史を無視することも許されないであろう。今回遺跡の発掘を通して、わずかな時間の、わずかな部分の歴史を掘り出し、具体的で、個性的な島の歴史の一部を解明することができた。このことが今回の調査の最大の成果であったろう。

(大 山)

註

- (1) 中世の食生活については、渡辺実「日本食生活史」吉川弘文館、昭和39年を参考にした。
- (2) 藤田憲司「岡山県玉野市樋ヶ原出土の中世蔵骨器」「倉敷考古館研究集報」第9号、1974年
- (3) 大山真允「香川県における中世考古学の現状と課題」「浜河泉文化資料」第19・20号、1980年
- (4) 志道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質編年試案」「草戸千軒」No.48
- (5) 間壁忠彦、間壁慶子「備前焼研究ノート」「倉敷考古館研究集報」第1・2・5号

伊藤晃・上西節雄編「備前」日本陶磁全集10

- (6) 植崎彰一「(2) 東海、(V) 中世窯業の成立と展開」「日本の考古学」IV、昭和42年

[付 載]

出 土 人 骨 鑑 定 書

鑑 定 書

昭和55年1月29日付け、香坂第13号の鑑定嘱託書をもって、香川県坂出警察署長より、香川県警察本部刑事部鑑識課長あてに嘱託のあった鑑定は次のとおりである。

記

1. 鑑定資料

進行番号1, 白骨, 若干

2. 鑑定事項

進行番号1の資料について

(1)人骨かどうか

(2)人骨とすれば男女の別及び人数

(3)経過年数

(4)血液型

(5)その他参考事項

3. 鑑定経過

進行番号1の資料について、鑑定事項にしたがい検査をした。

(1) 外観観察

進行番号1の資料は、別添写真第1葉に示す状態で送付されて来た。

資料は、写真にも見られるとおり骨片が土砂に混じ、調査ができ難いので、資料を水に浸して静置し、土砂を取った。

土砂を除いた進行番号1の資料は、骨片で骨の分類は非常に難しいと思料された。

そこで、骨片を詳細に観察し、形態的特徴から、鑑定事項を充足する骨片を探し出した。その結果、次のとおりであった。

椎骨の一部……別添写真第2葉

肋骨の一部……別添写真第3葉

長骨端の一部……別添写真第4～6葉

手骨の一部……別添写真第7・8葉

歯牙の細片……別添写真第9葉

(2) 人獸骨の検査

進行番号1の資料の骨は、その形態からみて、人間の骨と判じてよいものであり、獸骨を含んでいないと思料される。

(3) 骨体数の検査

進行番号1の資料は、別添写真に示すとおり、骨片の集まりで骨体数を調べるのに難しい。

また、同じ土中にある骨が比較的緻密な骨質のものと、海綿質のものが混在してある。

そこで、骨片の特徴、骨質などについて詳細に調べた。

進行番号1の資料の特徴ある骨が体の各部のもので重複する骨片は認められない。更には、骨の特性などから判するに、数体の骨と判するには無理がある。

(4) 年令推定検査

骨からの年令推定の材料は、諸種あるが、本検査資料においては、歯牙から行うのが、最も適当と思料される。

進行番号1の資料の歯牙は、別添写真第9葉に示すとおり、原形の一部をとどめている。この細片のうち、第9葉に矢印で示す5つは、破断面を無理なく符節させると、別添写真第10葉に見るとおり、歯牙の歯冠部である。

この歯冠部は、咬合面に殆んど磨耗を認めない。次に、写真第9葉に矢印で示す歯牙は別添写真第11葉に見るとおりであり、その歯の亀裂部で離開し、その歯ズイ腔を調べた。この歯ズイ腔は別添写真第12葉に示すとおりであり、それは歯根端に達している。（別添写真第13葉）

すなわち、20から30才前後のものと思料される。

(5) 燃骨・生骨の検査

進行番号1の資料の各骨片について調べるに、骨質に有機物を含んでいない。長骨片に別添写真第14葉に示すとおり亀裂が認められる。

有機物の有無による燃骨、生骨の判断は本資料では適当ではないが、骨の亀裂状況から観て燃骨と思料される。

(6) 骨の経年検査

進行番号1の資料が完全に乾燥した粘質土中に埋れており、比較的骨変化の進行の少ない環境にある。そのため、本資料からの経年期間は、同じ土中にある骨で変質状況がちがう事は、かなり古いものであると推測はできるが、どれくらいのものか判じ難い。

(7) 骨の性別検査

進行番号1の資料は、骨片の集合であり、性別の判定は仕難い。その中で、第9葉の歯牙が性別判定の1つの目安となる。

この歯牙は、男性に近いものと判ぜられたが、性別を調べるにはもう少し材料がなければ難しい。

(8) 血液型の検査

進行番号1の資料は、型検査を行うには汚れが著しいので、前処理のち血液型検査を試みたが、型物質がなく検査できなかった。

4. 鑑定結果

右鑑定経過から、次のとおり鑑定します。

進行番号1の白骨は、

①人骨と思料される。

②おそらく男性のものであるが、判定材料が少ないので難しい。

③一体の骨と思料される。

④かなり陳旧な骨と思料されるが、どれくらいのものか推測するのは難しい。

⑤燃骨と思料される。

⑥20から30才前後の骨と思料される。

⑦血液型は検査できない。

と判ぜられる。

この鑑定は昭和55年1月30日に着手同年2月23日に終了した。なお、本鑑定書に写真14葉を添付する。

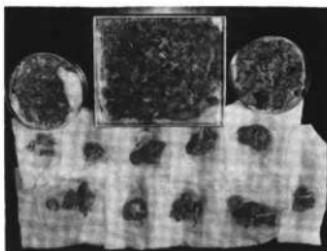
昭和55年2月25日

香川県警察本部刑事部鑑識課

香川県警察犯罪科学研究室

技術吏員 余島 弘造

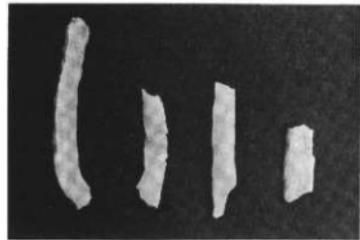
進行番号1 白骨



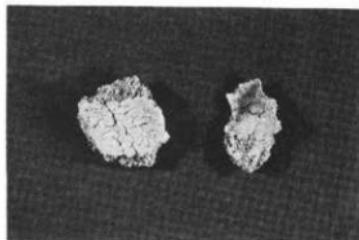
第1葉



第2葉



第 3 葉



第 6 葉



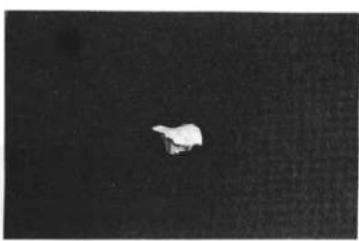
第 4 葉



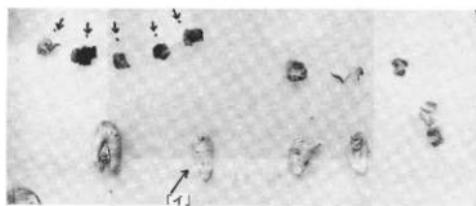
第 7 葉



第 5 葉



第 8 葉



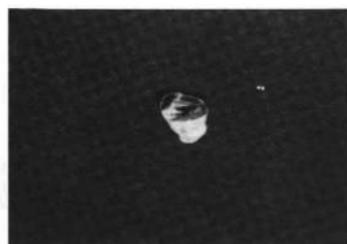
第 9 葉



第 10 葉



第 11 葉



第 12 葉

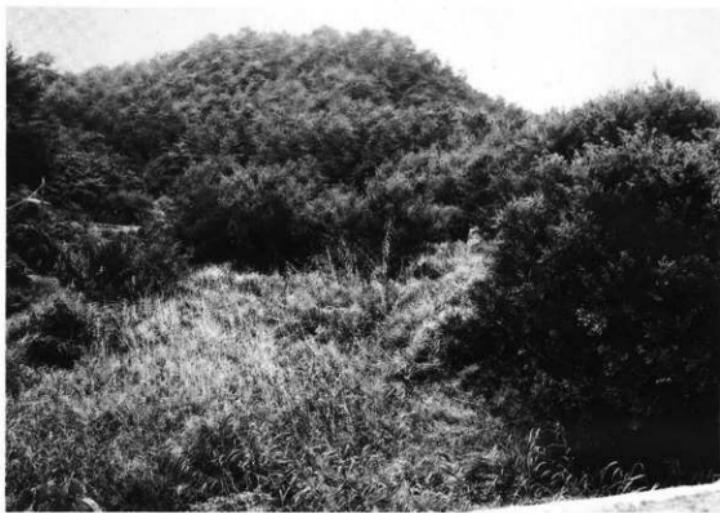


第 13 葉



第 14 葉

図版



(1) がんど遺跡調査前遠景（東から）



(2) 伐開風景



(1) 伐採後、調査区遠景（東から）



(2) 伐開後、調査区遠景（西から）



(1) 伐開後風景



(2) E—7区 調査前、五輪塔、石散乱状況



(1) E-7区 発堀風景



(2) 調査区全景 (南西から)



(1) E—7 区 五輪塔 石散乱状況 (南から)



(2) E—7 区 石散乱状況 (西から)



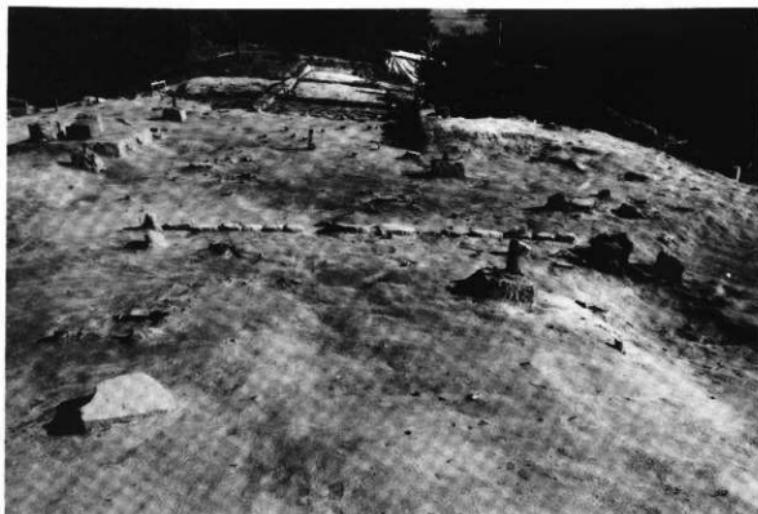
(1) 調査区全景（東から）



(2) 同上（南から）



(1) B, C, D区全景(西から)



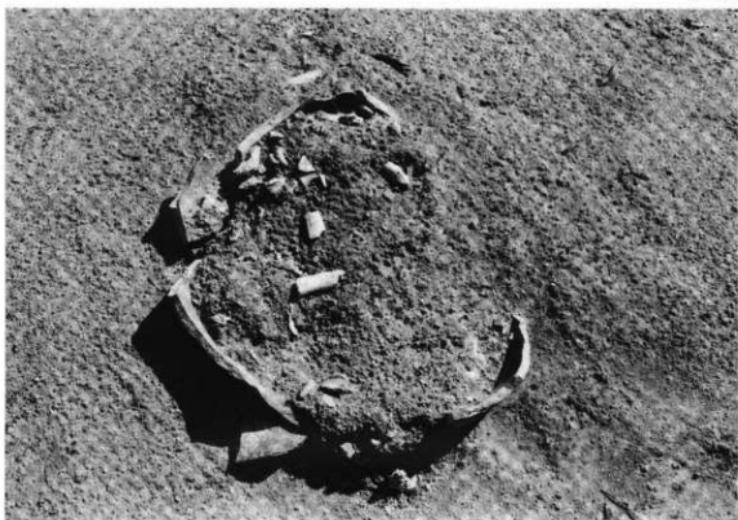
(2) C-11区 石列(西から)



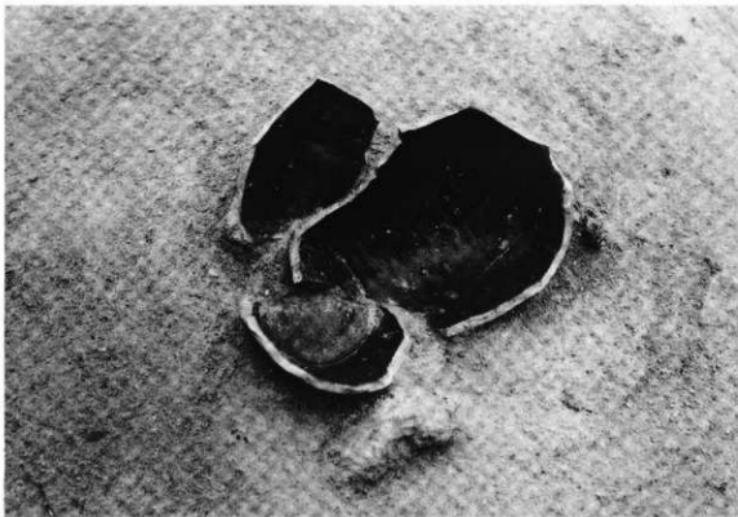
(1) E-7 区 5号墓・6号墓(南から)



(2) 同上(西から)



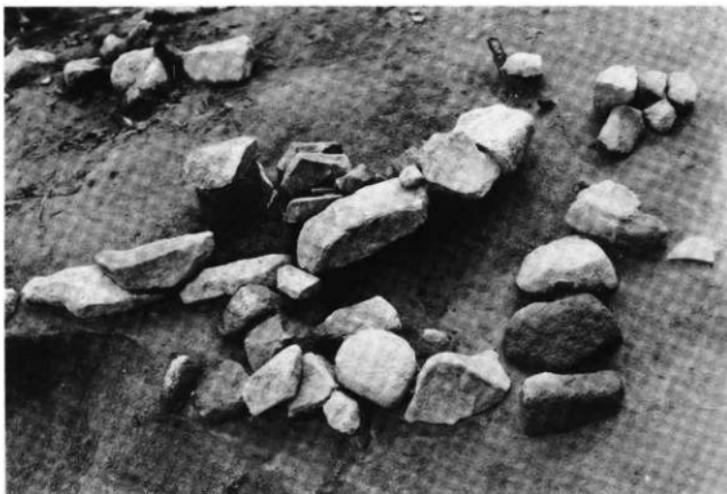
(1) E-7 区 6号墓骨壺出土状況（北から）



(2) 同上 骨除去後（西から）



(1) E-7 区 5号墓 (南から)



(2) 同上 積石除去後 (北から)